川柳塔

昭和四十年九月二十五日　印刷
昭和四十年十月一日発行（毎月一日発行）

川柳雑誌改題第一号

十月号

川柳句集

檸檬（れもん）

橘高薫風著

A5版 定価 500円（送料共）

視野無限
この言葉に尽く

麻生路郎序

取次所　川柳塔社

川柳句集

凡人

浜田久米雄著　麻生路郎序

定価 300円
送費 50円

取次所・川柳塔社

大阪文化祭《第17回》川柳大会

恒例の大阪文化祭川柳大会は本年第十七回を迎え、次のとおり開催いたします。初心者の方も多数投句されますよう。また、どなたも出句の有無にかかわらずご来場下さるようご案内いたします。

大阪府
大阪市
大阪府教育委員会
大阪市教育委員会

○日時　昭和四十年十一月二十七日（土）午後四時開場
　　〃五時開会

○会場　大手前会館三階講堂（市電＝京阪東口）

○講演　大阪市史編集委員　川端直正

○兼題　実力者（近江砂人選）
　　現金（岡橋宣介選）
　　特ダネ（中島生々庵選）
　　土（堀口塊人選）

○席題　当日二題発表　締切六時三十分

○賞　席題兼題共優秀句には府知事、大阪市長、大阪府、市両教育委員長から「文化祭川柳賞」贈呈

○兼題投句　各題ごとにハガキ一枚に二句ずつ、住所・氏名・雅号を明記

○投句先　大阪市北区中之島一丁目
　　大阪市教育委員会内
　　大阪文化祭川柳大会係

○締切　十一月十日着限

○入選句集　希望の方は投句の際百円添付

・今月のことば・

中島生々庵

「川柳塔」社が産れた。

実はまだ哺育室で静かに生活を送っている未熟児である。

未熟児といっても、早産児でもなく奇型児でもない。四肢五臓五腑完全に整い生活力も旺盛である。ただ体重が2.5キロ以下であるために医学上国際的約束で未熟児と呼ばれるわけである。

未熟児というかよわい生命力をどう護ってゆくかに就いて小児科医者にはきびしく申し渡されている心構えの条件がある。その中の二つ三つをあげて見る。

○弱いともしびに、いろいろ処置をすれば却ってともしびが弱くなったり時とすると消えることがあり、栄養も過剰に与えることは意味のないばかりでなく栄養不足よりも危険なことがある。

○「生命を救うこと」の方が「急速な体重増加」を考えるよりも、より重要である。

○いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしょうとか、そうしたあせりや功名心を出してはいけない。

「川柳塔」を逞しく明るく育ててゆく上に示唆される点が多々あるように思う。

宿命におろがみながら子を育て　生々庵

十月号目次

今月のことば……中島生々庵……(1)

しっかりやれよと

激励の花束……(24)

楫元紋太・近江砂人・堀口塊人・紫痴郎老人・石原青龍刀・三条東洋樹・大嶋濤明・布部幸男・福永泰典・桜井六葉・榎田竹林・富士野鞍馬・大森風来子・池田可宵・河野春三・高須唖三味・北村白眼子・岡橋宜介・大野風柳（52）（順不同）

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

川柳塔……（同人吟）……北川春巣選　若本多久志選　中島生々庵選……(4)

踏ンづけちゃう……川上三太郎……(19)

「川柳雑誌」の終刊から「川柳塔」の発刊まで……若本多久志……(18)

川傍柳初篇研究……（二九）……(22)

丸十府・岡田甫・川端柳風・高須唖三味・前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・

川柳太平記……（八）……富士野鞍馬……(34)

久しぶり

三太郎氏と夜を更かし……中島生々庵……(20)

川柳塔

生命の一頁……麻生葭乃……(37)
「川柳塔」の選にあたって……北川春巣……(16)
「近作柳樽」の選にあたって……川村好郎……(42)

第二の人生……(順不同)……(44)
—同人特集—
後藤梅志・戸田古方・不二田一三夫・本田恵二朗・川岡霊眼子・早川清生・

近作柳樽……川村好郎選
菊沢小松園選……(38)
大萬川柳「割り込み」入選発表……清水白柳選……(58)
金泥集……麻生葭乃選……(52)
作句教室……清水白柳……(50)
★柳界展望……(薫風)……(56)
★本社九月句会……(庸佑)……(53)
★各地柳檀……(文秋)……(63)
「傘」……石倉旅風選
一路集「停電」……山根白星選……(49)
「盆おどり」……若本多久志選
★編集後記……白柳・一三夫……(64)

川柳塔

北川春巣選
若本多久志選
中島生々庵選

大阪市　市場没食子

路郎先生を悼む（二句）

柳聖の死を早めたり無理疲れ
巨木倒れて柳界小さう見え

M氏還暦

初孫を見る還暦のすこやかさ
嫌がつている胃へ冷めたいものを入れ
職業柄肥えるを嫌うて娘が二食
老化予防に働いてると笑うておき
日曜出勤電話のもりのあほらしさ

島根県　藤井明朗

金のない色気は女加減する
信念に生きて平社員で終り
くせだけは親父に負けぬむすこ居り
テーブルの下不機嫌な妻の足
着飾つて女同士は目で探り
つつましく生きても女噂され

岡山県　浜田久米雄

師を想う日はひぐらしがやけに鳴き
ご先祖に見られたくないほどにやせ
気をつけて受けよすぐ酔う年になり
サボテンが咲いて誰かが来そうなり
晩酌が暑さに負けたように減り

倉敷市　田垣方大

師の葬儀に参列して

話しかけるような弔辞がよけ悲し

さあみんなこれからだよとおん遺影
雑草の強さがほしい御曹子
石段にいやでも歳を知らされた
取材班海女の焚火にてれている

大阪市　正本水客

小草みな倒れて青い青い波
展望台指の先からもう霞み
一泊の旅おうげさにおうげさに
溜息を聞いててくれる人がいず

吉展ちゃん事件解決

担当刑事の涙みんなの涙とも

岡山県　本田恵二朗

おむつ干す倖せハミングがこぼれ
昼寝しにおいでんさいと浜ぐらし
腰の骨油の切れた音で鳴り
大だこのさものんきそうに干されてる
献眼をした目いたわるサングラス

堺市　吉田圭井堂

聴く方が心配してる通話料
前立腺を粋な病気と間違われ
また次が出来て還暦飛び廻り
不景気が円満居士にしてくれず
好転のきざしに破産新記録

高槻市　傍島静馬

社をやめてタオル一枚持つて来ず
倒産の整理に慣れたあほらしさ
墓建てぬことで兄弟気が揃い
外遊も二度目鞄も小ぶりなり
トンネル開通素通りされる街となり

尼崎市　長谷川三司

お一人ですかと女按摩に惚れられる
成田山のお札女難は別という
もう秋か女の顔も秋となり
遠花火悲劇の主人いまはなし
老生と書いて嬉しい便りする

加賀市　那谷光郎

せち辛い世を耐え抜いた眉白く
洒落言うて帰り眼鏡を忘れたり
名署長いつもポケットにガムがあり
まだ斗志満々古稀のゴルフ熱
秘書役じゃあんなカラット光るまい

大阪市　後藤梅志

師逝きぬ根性ばかりもらいうけ
窓口で貸せば焦げつきにはならず

生れるも死ぬるも文珠菩薩かな
照明に云えば舞台に月がさし
パチンコで親孝行のできる腕

岡山市　服部十九平

老漁夫の義眼烏賊干すとき光る
油売ることにも慣れて課長補佐
大杯を干して北爆可と断ず
半処女も非処女も綺麗な眸で並び
配られた国旗を物干竿で立て

門真市　福島鉄児

片足は踏まれたままで駅につき
尻押している駅員の汗光る
交通戦争僕も交通戦車隊
何を考えているのか目玉よく動き
何んぼ金あつても足らぬコマーシャル

美祢市　安平次弘道

ジンクスを意識しすぎて破られず
何とか成るだろうと約手で払い
千客万来万引もまじり
それみいと詐欺にあつたを笑いに来
鉄塔がちぢかむように雲が湧き

大阪市　石倉旅風

蠅止まるブラウン管のラブシーン
盆踊り諦めさせるビルが建ち
よくみればさる金持は愛に飢え
北山で聞けばしずかな蟬時雨
批評家は鮨を崩して食う如し

大阪市　金井文秋

水菓子を作つて楽し冷蔵庫
理想論ふり廻わされて理事悩み
一日をまめに動いてすぐ寝つき
むしタオル汚れを中にして返えし
実行は説教してる身も出来ず

米子市　小西雄々

一流のホテルに泊り落着かず
キャンプの荷だけは重たくない若さ
都会の灯よりにぎやかなキャンプの灯
暑さ負けしたのか黒枠また届き
噂にはふれず失意の友へ酌ぎ

笠岡市　木山遠二

其場では虫の報らせとよう知らず
句日記のみんな駄句なるたのしけれ
丁寧な悪筆にして奥床し

御無沙汰の校門くぐる夕涼み
内職の手へ昼の蚊がつきまとい

加賀市　野村味平

あの人も去んだか俺も持薬飲む
ヒズミさへ直せと池田冥土から
のんのんとして職安でけちがつき
からつぽの頭へ儲け話が来
人生の寂しさ老いて酒の味

大阪市　山川阿茶

新盆

初めての帰省へ蓮の台下り（うてな）

甲子園

逆転へうれしい裏の淋しさよ
金出来て命が惜しいドツク入り
ドツクから帰つて粗食に切りかえる
ねぶた眼をこすつて初発の墓詣り

愛媛県　村上旭童

この雨は雨読のさたでない嵐
蟬ついに網にかかつた声になり
自家用で帰る子もあり盆の島
恩給がついたらやめる蜜柑苗

先生哀悼

巨星おつそんな言葉ですまされず

青森市　工藤甲吉

うなぎ屋の前で空腹ハラが立ち
二時間も塗つて女は化けて出る
労組はゴルフ場まで押しかける
君と僕長じて右派と左派になり
俺よりもみんなエラくて反り返り

高槻市　若柳潮花

騒音へ虫も宿替えしとうなり
這うように起きて自分の粥を炊く
鮎はねた時の姿で焼かれて出
踏切の赤へダンジリ押し戻し
三切れたままで幕まで弾きつづけ

京都市　室井八九寸

鬼の面はずせば可憐なおさげなり
仏心も限度お寺の雀狩り
御手洗に息災祈る足を浸け
永年のカン統計に従わず
天然だネとずばりうなぎ通

呉市　林野甦光

ドリンクでもたす身体をうらやまれ
有情のかけらマツチをすつて呉れ
身動きの出来ぬ鶏舎で生み続け

夕立ちも時雨も来ない世に変り
医者の無い町でも保険掛けさされ

大阪市　本多柳志

大阪の善意は金で見積られ
おみこしも交通マヒに遭い給い
間に合わぬゴルフの腕を左遷され
ていねいに香具師も拝んで荷を拡げ

甲子園高校野球

甲子園進軍ラッパ鳴る平和

今治市　越智一水

悲しみがまだ去らぬのに風立ちぬ
ワッペンを内の子句帳へまでもはり
夏に足袋はくとはなさけない病い
水銀灯僕の恋には明かる過ぎ
美くしい恋が丘から見る煙

岸和田市　内藤きさ子

仲人は野良着のきりよう見のがさず
くされ縁ですとゆかたもお揃いで
一ぱいのウイスキーだけの浮気です
見る気ではないがいれずみチラと見え

路郎先生を憶う

休む間もなし天国の句座が待ち

防府市　長野井蛙

一夜漬のセリフを土壇場で忘れ
野心みな捨てて平和な井の蛙
金で得た女に金へ寝返られ
丸腰の強味は天下に敵がなし
金につながる涙は惜し気なく流し

平田市　久家代仕男

冷害だやれ台風だのと鍬重し
裾高くからげ出水を市場籠
台風が逃げて平和な赤トンボ
値上りの愚痴も刻んで台所
毒舌のそこが取得とおだてられ

大阪市　河井庸佑

下駄にまるつけた悲惨な事故現場
思惑のある招待と知つて行き
子には子の言い分があり通知票
運動会わが子ばかりを追うカメラ
のらりくらり答えるこつも心得て

奈良市　宮口笛生

奈良にて

バス停車ただ今鹿の横断中
作らない役人米値審議会

二次会へおさまりつかぬ今夜なり
かんかん照りの畑で草の根が固い
金魚鉢きれいな色で夏を生き

新居浜市　小林孝正

迷うこと多し灯明の火を点す
平の椅子せめて胸なとしやんと張り
寂として参道蟬だけ生きている
吹けば飛ぶような店にもライトパン
自衛隊野球していて国平和

竹原市　山内静水

こんな水飲むにも都会金が要り
姉女房とは見えませんつのかくし
露出過多娘足の毛目立ちすぎ
しばらくはお膳へ夫婦きりで座し
祝開店の隣へ便乗して儲け

枚方市　宮川珠笑

子にプラスすると信じた叱り声
まあまあのまあが気になる聞き合せ
晩酌を酌ぎあう父母がいて楽し
痴漢とは紙一重なり酔うている
疲れてるまぶた閉じれば音がする

神戸市　仲　どんたく

嫁にやるように竣工引渡し
デザートが出る頃です人生フルコース

初孫誕生

男前やぞうと初孫報らせに来
顔しかめてるのに笑つたよ笑つたよ
金儲け下手なところは似るなよと

大阪市　橘高薫風

恩師の死その夜眠むしとも眠むし
柳も雲も後姿に恩師の死
恩師の死手に止まる蚊をただ見詰め
父の眼を時折僕に下さつた
天守閣の姿の消えたむなしさだ

高砂市　吉原紅月

八月三日入院三句　白鋒先生執刀

冷房の個室見舞に羨まれ
抜糸した腹を子供が見度い云う
寄書に術后のベッド励まされ
里芋の葉が首を振るにわか雨
夏ぶとんの据へもう秋が来た

豊中市　戸田古方

鈴虫はとなりで飼つておりました

きき耳をたててひぐらしききわける
毎朝の日の出をしっているくらし
赤インクは赤色青インクは青色
塔は生命あるもの鳩が舞う

出雲市　尼　緑　之　助

三角な月よどこかでキリギリス
立秋と暦が告げる月が出た
決断のヒントは横に飛んだ星
妻老いぬ顎のはずれる大欠伸
師の写真亡さ実感はまだ湧かず

大阪市　不二田一三夫

無学のホステス教授の骨を抜き
うすい毛をかばい扇風機を避ける
合いづちが早すぎ話の腰が折れ
走りだしてから無免許だとわかり
女四十もうあわてないあわてない

京都市　松　川　杜　的

肩書に頭を下げて悪びれず
熱戦の球児に済まぬトトカルチョ
倖せは町内に踊れる空地持つ
腹の立つ宵なりお琴でも聞かん

西宮市　樋　口　舟　遊

思想なき静いへちまぶらさがる
イデオロギーその宿命に死ぬ兵士
異分子のみだす平和にしがみつき
たえまない建設日当は二千円

倉吉市　奥　谷　弘　朗

下積みの俺にもすがる妻があり
田の土が足で乾いている昼寝
事勿れ主義と悟った小役人
山の子を海に招くと云う善意

大阪市　西　出　一　栄

冷房車降りて残暑の尚きつく
　十二度目の白浜に滞在して
ご来光をはだかで拝むも湧湯なる
ふる里のようなここちで湯にひたり
浮袋持った腕へ貼ってるサロンパス

高槻市　福　田　丁　路

絶体にガンではないと思えども
執念の鬼と云われる目の光
湯の宿の過剰サービス持て余し
　大津石山にて
秋近し石山寺の岩清水

富田林市　吉岡美房

少年に死刑はないというやくざ
両親なんかあるかとチンピラ空を向き
ボス保釈外車ずらりと並べられ
蚊柱や故郷の田圃売ると決め

岡山県　池田古心

結構な身分で釣りするように云い
梅雨長しピースもバットの味に落ち
算盤の百姓するなと動く玉
悪女から女の味を識らされる

笠岡市　出原真奇

巨星墜つショックショックショック
老人の愚痴は戦死の子を想い
末ッ娘が一番遠いとこへ嫁し
友情が清水の如く湧いた山

大阪市　宮尾あいき

生みの親に相談も無く顔を変え
パパのシャツママの好みの赤い色
むき出しにするなと山の蚊にさされ
神経痛云い訳にして膝崩し

篠山市　遠山可住

篤農家飲んでも作ることばかり
ビール出されて無心の腰が折れ
いつからか熱湯が好きで嫌がられ
邪教もう次の不幸をキャッチする

小松市　関戸宗太郎

スピーツに吠えられながら荷をひろげ
家が建つはずの保険でテレビ買う
冷害のニュース木陰で聞く部員
夏休み予定表どうりに目がさめず

富田林市　浅川八郎

死なすより生かそうとする残酷さ
孟蘭盆に関する限り強き姑
円満と言われあほとも言われ母
お転婆の文字を抹消戦後派の

芦屋市　丸川初甫

おじいちゃんと云われる余生気に喰わず
ピストルで射たれる恰好も芸の内
ダムを見る夏の日やけが気にならず
五重塔写すカメラちよちよくばり

兵庫県　河原みのる

牡丹燈籠で迎い来るなら逝くもよし
二重首振り扇風機
扇風機よイエスかノーかどっちだい

どう弾いてみたかて保険死なな損
汚職まで被い給わぬ起工式

鳥取県　清水一保

夏やせのしたい若さを羨やませ
人格の補充を金でする憎さ
胃腸にも見捨られそで謹慎し
秋波に名残が尽きぬ海水着

岸和田市　高橋操子

故路郎先生へ二句

丘に来て見ても届かぬ雲の峰
雲の峰信じて今日も仰ぎ見る
孫の絵に間違いはなし市長賞
宗教論ちよっとつついてみたくなり

布施市　久米奈良子

きみといて孤独の渦にひきこまれ
霊場へ恋のぬけがら捨てにゆき
かしましくしやべったあとのさわやかさ
水かけてお不動さまへすまながり

大阪市　西田柳宏子

惜しまれて逝く幸せと他人は云い
犬迄も好き嫌いある御用聞き

キャンプ場にて

目につかぬ処は道徳放つとかれ

川柳塔誌の出発を祝す

生命ある句への遺訓を真しぐら

鳥取市　森本法泉子

路郎先生御長逝

庭先に大きな穴があいたよう

高知出張

不測土佐できく正調安来節

妻の入院続く

夏物をさがせばここは妻のもの

芦屋市　若林草右

悲しみを怒りに変える事故現場
手を抜いた廊下は驚張りとなり
三重苦落選入院逮捕状

出雲市　原独仙

水着着た妻の姿態に二度惚れす
値上りの愚痴晩酌の酔い切れず
他人に聞く父母結ばれた盆踊り

大阪市　田中十方

学期末懇談父さん行つて来て
実力者あくどい方の話も出
屑屋にもプラスアルファーの苦心をし

姫路市　隠岐不酔

浅学でなどと博士であるくせに

にくらしい税吏臍までとると言い
オイコラと呼んで平和に五十年

熊本県　有働芳仙

亡き父の轍をやつと辿るだけ
扇風機へああ大胆さ女一人
釣銭はいいよと美人連れている

岡山県　直原七面山

馬上豊に砂丘を越えて行く二人
算盤づくの恋でないのでもめ続け
夕立へ素知らぬ顔でいる金魚

布施市　本多清人

絵日記に書くことがなし貧しい子
喧嘩してみたが行くとこない夫婦
仲人の決断しばらく別居さす

岡山県　田村藤波

病床の意欲秋風おそすぎる
停電の暗黒妓の黄な声
些細なる縁故で傘を借してくれ

大阪府　西いわを

見透しがつかぬところに面白味
スラックス履いてお犬さんを抱つこ
いやですわピアノをデコラ塗と云う

大阪市　福井野迷路

閻魔さん実力者からごぼう抜き
見覚えの目をそらされてそれつきり
盗品の買戻し刑事に教えられ

大阪市　今西章雅

艶自讃顔は酒税の表彰状
奥さんによろしくと云う元ライバル
主婦連へ深夜映画が挑戦し

奈良県　西辻竹青

御期待にそえぬがなどとへりくだり
夕食をよばれただけがタイホされ

嗣子吉典四周忌に偲ぶ

よい養子だつたと仏に言う供養

岡山県　横山一声

夏やせをしたのを娘自慢にし
二人目が生れて素顔の日が多く
また赤字かと税務署の目が光り

守口市　羽原静歩

宙ずりのロープウエイをふと思い
クーラーの部屋で易者にものを聞き
エンジンの音で浜名湖明けてくる

加賀市　梅田久雄

混浴の女死角へ身を置いて
混浴の朝の光りがまぶしすぎ
ふぐの味知らず中毒死を笑い

大阪市　天正みさ子

名画展皆んな分つたような顔
成長株越境さすのも親心
越境入学事故死させても目がさめず

小松市　馬場魚山

どの皿も残す残暑の冷奴
団体は夜汽車とバスで追い廻し
広島に来て観光の目がうるみ

大阪市　児島与呂志

縄のれん電車屋さんかとしたしまれ
市電又此処から先をチョン切られ
善意まだ実らぬ世間の目に出合い

布施市　渋谷三時

聞き合せ尾ひれをつけて帰つて来
無免許の水の溜りを避けそこね

京都府　西村句楽坊

一枚の経木に自慰の施餓鬼料
飯の蠅追うよう蟬取り追う和尚

岡山県　野々口美舟

新聞へ合掌をする師の逝去
惜しまれて逝く師三途は歓呼なり

諫早市　大崎筆染

裃を脱がしてしまう酒の酔い
妻の座をしつかと掴んだ座りだこ

出雲市　中川晃男

おみそれをさせ役人の浴衣がけ
泳げない子を泳ぐ子を母案じ

松江市　柳楽鶴丸

嬶天下里では優しく夫をたて
税金でやしなう役所見まわして

愛知県　原峻一郎

子への夢孫へ移したまんま逝き
火事場から人形下げて泣いて来る

大阪市　宮地双楽

朝顔もしぼんで起きた日曜日
農薬のせいか飛ばない赤とんぼ

愛媛県　渡辺暁童

大阪の親類サラリツト戻り
足を組む娘うちのと同い年

大阪府　新川博也

表彰台女史はベレーを着たまんま

妻不服春・晴となりも出やはつた

★

白骨温泉にて

上求菩提下化衆生ここだ虫の声
介山碑の上をひとひら秋の雲
白骨の湯の香湯の色夢うつつ
龍之介のイメージがあり露天風呂
ひなびたる温泉喜こぶ齢となり

西尾　栞

面白くない酒だから酔うて来ず
インタビューへ横綱ブツキラボー
健康法別にないさと七十五
鶏卵暴落オムレツは同じ値
押され押されて不渡りで倒産し

若木多久志

埋立のすすむ川かて流れてる
釣鐘の由来を聞いてから鳴らし
真先き咲くあだ花を羨まれ
秒読みになつて定年遽てる
一万札の汚れが目立つ物価高

菊沢小松園

涙かわき嬲々として身を正し
白い嘘霊あらば弔辞なんとする
手の筋を信じてるから逆からわず

中島生々庵

喜怒哀楽六十五才の色となり
ドライアイスしのばせ夏の借り衣裳

松江梅里

家柄の槍ひとすじに肩が凝り
スランプを抜けるあがきへ負けつづけ
手を切つてからの赤字は認められ
条件の悪いことには飲んでいた
一姫が世継ぎのための道をあけ

清水白柳

真剣なまなざしよ絵本は汚れていない
大きく呼吸を吸うて日輪を迎えよう
置時計陽差しを受けて狂いそう
木蔭で脱いでいる黄色いヘルメットよ
ヘルメットが欲しい小型乗用車での悪路

川村好郎

お隣のピアノも暑いもののうち
まだ六十もう六十のむつかしさ
恋とくらしインターチェンジに似る
相談は金でなかつたビール抜く
七階の粗品貰うてすぐ帰り

北川春巣

一万歩運動　会う人会う人に
歌うたうように戦後二十年二十年
宿命論者で不運を諦めず
級友のたよりも成人病に触れ
所により俄雨とはよいことば

川柳塔の選にあたって

北川春巣

柳誌「川柳塔」創刊のことは、急遽決定したことではありますが、その事情については「川柳雑誌」の終刊号その他で読者諸賢すでに大体ご承知のことと思います。要は、故麻生路郎先生が六十一年間育てられた川柳の大木を枯らすまいとの、残された門下生共の大願であります。

路郎先生亡きあと、川柳界は「専門家」のない世界になってしまいました。われわれ門下生はそれぞれに仕事を持っております。路郎先生は「専門家のない世界は発展せず」と呼ばれました。片手間の仕事では十分な雑誌発刊の仕事ができないことは分り切っておるのでありますが、それにも拘らず「川柳塔」創刊に踏切ったのであります。「川柳塔」は今までの「川柳雑誌」とは全然関係のない、組織も丸っきり違った雑誌であることもちろんでありますが、それでも目に見えない糸で「川柳雑誌」と結ばれておるように思います。路郎先生の門下であった不朽洞会会員を同人に引き継ぐことも議決されました。その他希望者は、旧不朽洞会会員（現川柳塔社同人）の推選によって、誰でも同人に参加することができます。「川柳塔」誌は同人誌となったわけであります。

この「川柳塔」という名前も、色色と議論はありましたが、「川柳雑誌」の路郎先生選句欄の名前を取ることになりました。そしてまた同人の投句欄の名称も「川柳塔」とすることに決まりました。同じ川柳塔欄でも、「川柳雑誌」時代の川柳塔欄とは意味が違うわけであります。今までは路郎先生のお選を経て句が発表されたのでありますが、今後は同人は同じ資格でこの欄に投句し、発表する権利を有するのであります。

私は、同人の自選句を五句なら五句、投句されたものを全部発表すべきだという意見を持っていました。所が会議の席上でまた意見が出まして、同人といいましても、前に述べましたように路郎先生門下の旧不朽洞会会員もいるかわり、新しい人も当然はいって来られるわけで、これを同列に自選句を投句せよといっても無理な人があるのではないか、というのであります。失礼ながら川柳としてはどうかと思われる句が投句されることも、考えられなくはないのであります。そこで誰か「川柳雑誌」の伝統を持っている者が、発表の前に投句に目を通して、余りな句は勝手ながら削除すべきである、と決定しました。これは選をするというよりも、目を通させてもらって、不適当な句は省くという軽い意味で、私も了承しました。

しからばその役は誰が引き受けるか、という段になりまして、この役は大役であるからひとりだけに責任を持たすよりも、三人ぐらいの目を通すのが妥当であろうということになりました。相談の結果、中島生々庵氏、若

本多久志氏、それに不肖私、という三人に決まりました。ここにも「川柳雑誌」との目に見えぬつながりがあるように私には感ぜられます。

俗にいわれていることばに「番傘調」だの「川雑調」だのということばがあります。いわんとすること、すなわち句の狙いは同じでありましても、その表現方法に多少ともニュアンスの違いが両者の間にあることは否定できません。私の例を申して恐縮ですが、もう約十五年も前、私が兵庫県高砂におりました頃、姫路城での花見句会が、そこの「ふあうすと」の人によって催うされ、私も高砂から国鉄高砂工場の柳人達と一しょに参加したことがありました。所が私の作句したのと同じような句はしきりに抜けるのですが、私の句はほとんど抜けません。もちろん数多く抜けるのが川柳の名手だとは限りませんが、私は自分の力量が低下したのではないかと情なくなりました。所がそれから半月ほど後、川雑備前支部の大会が、岡山県吉永町で行なわれました。これは路郎先生の第四句碑「ふるくとも僕には仁義礼智信」が大森娯句楽氏邸に建立された時で、路郎先生も出席されました。この時には私の句が意外によく抜けたのであります。もちろん姫路城の句会の時とは意気込みも多少は違っていたかも知れませんが、私自身の真価が急に変ったわけではないと思います。両句会とも投句はもちろん無記名でなされましたので、抜いたかたは、私の句であると知って抜いたわけではありません。選者の「ふあうすと調」と「川雑調」との違いが、そこに表われたのではないかと、今でもその感慨が深いのであります。

今度の川柳塔社同人には恐らく色色の色彩の人がはいられることと思い、またそれを希望するのでありますが、句を見せて頂く私の気持としましては、あらゆる派閥というか「調子」を超越した気持で、見せて頂きたいと思っております。生々庵氏や多久志氏のお考えも恐らくまた同じであろうと思います。

また前にも申しましたように、入選句数の多いほどエライというものでもありませんが、みんな同格の同人が、同数の句を投句されるわけでありますから、発表は入選句の多い順にさせて頂きたいと思います。以前、路郎先生選の「川柳塔」の場合には、不朽洞会会員名簿の順に入選句が発表されておりましたので、自分の席はほとんどいつも決まっておりました。あるいは会費を多く払う特別会員の句や、維持会員の句が、正会員の句よりも前に出ているという状態で、抜け句の多少には関係ありませんでした。しかし今度の川柳塔社同人は会費も同じで、全く同じ資格であります。順序の付けようがありません。名前のイロハ順、あるいはＡＢＣ順でもよいかと思いますが、それよりもいっそのこと入選句の多い順序に発表させて頂くということも、気合いを入れて作句するという意味で競争にもなりましょうし、励みも出、興味も出はしまいかと考えます。そのように大切な句の選を私共がするということが、どうも僭越に私には思われるのであります。生々庵氏、多久志氏も同感であろうと思います。が当分の間はこの方式で行くことに決まりましたので、何とぞその辺の事情お汲み取りの上、多数のかたがたのご投句をお待ちする次第であります。

★規定の十句を越えた句は翌月号へ順おくりにさせていただきます。（編集部）

近　詠

松山市　月原　宵明

悼路郎師（二句）

最後まで詩を追及してやまず
身の程を知って屋台で自　する
掌の上で「やっこ」になってゆき

台風十七号

静岡で十七号と逢う社用

東京にて

大東京和服の人が懐しい

川柳雑誌の終刊から川柳塔の発刊まで

若本多久志

感じやすい少年の頃、

「仰げば尊し我が師の恩」と胸せまる思いで歌ったのち、在校生達の「螢の光」に送られて校門を出た、あの時の気持が丁度、川雑廃刊から川柳塔発刊までの復雑な心の推移ではなかったろうか。

今だから言えることだが、昨年十二月、故路郎先生が我々六、七人の門下生を集められて、

「川柳雑誌は路郎と共に亡ぶべきものであり、それは私の健康がこの仕事を許さなくなった時、又は死を迎えた時である」

と高遠な理想と、固いご決意を語られた時、我々はそれぞれ、その後の対策についての考えを申しあげたみた訳であった。

然し、先生はそれに就いて、良いとも悪いともお差図はなく、只その道が如何に苦しいものであるかということを、しみじみとお説きになっただけであった。

今回のご発病以来、只管、ご全快を祈念し乍らも、はかばかしくないご病勢に心を痛めていた矢先き、五月号、つづいて六月号の不朽洞句帖に出ているご作品を拝して、ハッと胸を打つものがあり、不吉な予感と共に、その後始末に対する覚悟を迫まられたような思いであった。

先ず中心人物となって頂かねばならない生々庵氏の問題を、あらかじめ路郎先生にそれとなくお話してご諒解を願い、その内に、ご病床で会談願う計画を立てていたのであったが、先生の急逝で、これは間に合わず、あの劇的なご霊前で葭乃先生を介してのご対面となったのであった。

このお通夜の晩、生々庵氏が霊前に涙を流して礼拝された時、我々の気持が通じたのか、先生のお写真が心なしか、ニッコリ微笑まれたように思ったのは私ばかりではなかった。

ああ、思えばこの時我々門下の有志の胸中、既に「川柳塔」誌創刊の固い決意が、期せずして生れたと言っても、過言ではないのである。

ご本葬の席上、門下生を代表して生々庵氏が捧げた弔辞にも、これを高らかに宣言すると共に、この我々の決意を土産とせられて、西方十万億土への安らけき旅に、ご出発願う送葬の辞でもあった訳である。

幸にも川柳塔編集の最高責任者として、清水白柳氏のご快諾を得、その実務者としては、かって路郎先生膝下で永年、編集の名アツシスタントであった、不二田一三夫氏を迎え旧不朽洞会員三百余名を同人として、バックに持つ、この「川柳塔」は、路郎先生の霊に守られながら、洋々たる前途に船出した次第である。

どうか全国の柳人各位、一層のご指導と、ご鞭撻を賜り、故麻生路郎の遺児「川柳塔」をご援助下さい。

—四〇・八・二〇—

踏んづけちゃう——

川上三太郎

〝川柳雑誌〟は故人の志によって廢刊とあった—そして私にはうなづけた。いかにもあの人らしい結着だからである。あの人の一生は

君見たまえほうれん草が伸びてゐる
雲の峰という手もありさらばさらばです

の二句に尽きる。第一句のこれから—第二句のこれまで。しかもこれはあの人のこれまでであって、あの雑誌に拠って川柳の道を歩く事を知った人たちの、その作品までやめてしまえといふのではない事もちろんである。だからこの雑誌が創られたのである。

この雑誌に拠る人々はあの人の追慕で終始してゐるだけでは意味をなさぬ。それこそ却ってあの人の遺志に反する事になる。言ひ換えればこの雑誌の人々はあの人の求めたものを追ふのみならず更に一歩前進して、あの人の求めて得られなかったものを求めるべきである。否、更に三歩前進してあの人の求めようとしなかったものまでを追って頂く。ここに川柳的生涯を懸けてもらひたい。

私たち七十才の時代はもう過ぎた。いやもうとっくに実は過ぎてゐるのだ。それを私たちは—少くとも私はあまえて易きについてゐた。これではいけない。私なぞは押し転ばして踏んづけてドンドン五歩十歩前進しなければならぬ。さうしなければ川柳の前途はない。かまはず踏ンづけちゃって更に諸君、さあ前へ—。

（原文のまま）

雑詠

今治市　長野文庫

大ものがずらり浄土の賑かさ
言葉つき多分ダイヤも偽だろう
人事課の情依願として許し
正直に云えば怒られそうな顔
無論損だが捨て石の特価品

和歌山市　秋月宏方

平担な道でなかった共白髪
離婚する甲斐性もなく年をとり
男湯は皆髭そりに来てるよう
まだ願い聞いてはくれぬ宝くじ
場末の銀座焼芋屋も並び
炎もすえて医学博士の母達者

久しぶり　三太郎氏と夜を更かし

中島生々庵

八月十一日。それは岸本水府氏の盛大な御葬儀が大阪四天王寺で行われた日である。告別式の後、川上三太郎氏、長谷川幸延氏御夫妻、岡橋宣介氏、脇田勇、梅子御夫妻等の諸先生と共にお手厚い御接待にあずかった。三太郎氏が大阪での滞在スケジュウルが少し変更になったので、その余栄によるとでもいうか、当日は浜寺諏訪の森生々庵居に一泊して頂くことになった。脇田御夫妻をお守り役にお願いし四天王寺から一路車を南に走らせた。麻生路郎先生の葬儀から一カ月

もたたぬ間に、しかもこの猛暑の中を再度大阪に馳せつけねばならなかった三太郎氏。お元気だとはいい条、大病後の御老体でもあるし、お疲れになるのが当然である。それになんといっても五十年六十年と深い御親交のあった路郎、水府という両巨星を殆ど同時に失われた御心境は、私達の恐察する限界からは遙かに越えるものがあるであろう。お泊りを願うにしてもできるだけ御自由にお気楽に、という風に心をきめた。しかしこちらから申せばティのいいほっちらかしのおもてなしとなるわけである。応接間をぬけたら一風呂あびて浴衣がけ、庭の芝生の上に設けた、涼み台兼用の食卓台（これは私が夏の間晩酌をやる臨時食堂）に荊妻小石も加わり五人が揃う。先ずは久濶のお詫びやら、お元気で何より、さぞかしお疲れでしたろう、さても三年前の御大病のあの頃を思えば嘘のようでお顔色やお歩きになる足どり等驚きましたよとお世辞ぬきの挨拶が一わたりすむと、とにかく一献となる。

久し振りにこうした会談の時間をゆっくり得たので

あるが、心なしか二人の新しい故人が私のために、この機会を作って呉れたような気さえする。もう十年も前のこと大阪の生々庵居で路郎先生御夫妻と、も一度は宣介さんと一緒にミナミの丸万で魚スキ、この二回位しか酒の出る席での記憶はない。たしか五年程前水府氏との対談が番傘の有志を加えて、句会のあり方、時事吟のことやらに相当長い時間を持たれた記事の記憶があるが、何れにしても私としては有り難い時間を持ったものだ。

私が晩酌に愛用の日本酒は大体きまっているが、私の好みをそのまま差し上げた。それに小石の手料理、椎茸きざみ込みのきうりもみはお気に召したかお代りまでして食べて下さって嬉しかった。

盃が進むに従って話は路郎、水府両氏に関するあたりから「川柳雑誌」の後に生れた「川柳塔」が背負う宿命的方向、川柳人としてのこれからの心構え等々、先生日頃の信念に基く御高見が諄々に展開してゆく。話はかた苦しい内容であるにもかかわらず、今まで活字でばかり拝見していた私の頭を手際よく整理して頂いた感じである。

「吟社として月刊誌の発行その他の経営が困難であることもさること乍ら、必ずしも山高きを以って尊しとせずである。徒らに支部の消長とか、句会の盛衰とか等に心労することなく一人でもいいから、ほんとうの読者を探し育てることが肝要である。すくなくとも私自身は、真の川柳家を一人でも育てるという一念で六十年を貫いて来た。現在の私として気になることは、川柳を一番劣等視し軽蔑しているのは川柳家自身であることである。間違ってならぬことは川柳家になることでなく、川柳家であることである。川柳家がよく口にするところの、川柳は余技でやってる等の言葉は、俳句とか短歌とかの指導的立場にある人達は絶対にいわない。精魂を打ち込み方の問題である。」非常にきびしく、火を噴く憂国の士のような口調でありながら、優しさは訓すが如く、教えるが如くである。

こうした雑談の中に、人間まる出しの三太郎像が躍動するのをじっと見つめながら私の盃も重なってゆく。十三歳にして川柳に走った動機やら、生れてはじめて活字になった。

橋立はテングの鼻のやうなとこ

が文芸倶楽部に載った時、ノドはカラカラ、魂脱けてトボトボとそこら中歩き廻ったと三太郎氏自身が書かれた記事を読んだことがあるが、そのころの姿まで浮んで来るのである。

前々から気になっていたことで、こんな機会には酔余のことと許して頂けるだろうと独りぎめして、先生にはいささか不似合と思われる左薬指の金指輪に就いてお尋ねした。一寸意表をつかれたような一瞬だったが

「聞いてくれるなら話そうが、実はこれ、親父が私のために作ってくれたものだ。今となっては肌身離せぬ思い出とも、我が身のお護り札ともなっている。」

いろいろ来歴をお話になったが、その父を語り、母を語るときの先生の童顔、うるんだ眼、なんともいえぬほのぼのとした尊いものを感じさせられる。古い「川柳研究」の蒼蒼亭放談に

「わが親を褒める愚かさを笑えば笑え、母の熱意と根気とによって、父が「本」というものに興味を持ち出し、それが後年私が川柳の道を歩きはじめた大きな因となった。」

と書いておられる記事を思い出す。指輪のこと聞いてよかったと思った。主客ともすず風にさそわれながら、そろそろ酔もまわって来た。

「センセイ、センセイは私の命の恩人ですぞ。」

こんな言葉が先程から幾度か先生の口から出る。私も小石も何のことか判らぬ。キョトンとしていると解説がついた。三十七年八月慈恵医大に入院されて大手術の際、大井博士に栄養失調ときめつけられ、食事の時間や量を厳守させられ、それにベテランの附添婦さん

の徹底した監視の下に注射と口からの責め苦にセツなく参っておられたその折柄、私達夫妻がお見舞に伺い、

「病院のベッドでは我がままは許されませんよ。医者と附添いのいうことは至上命令でありますぞ」

と申上げた。私自身では特に意識するところもなく、医者としての単なる当然なアドバイスだけであったのだが、その日からおとなしく食べる努力もしたり、注射の文句もいわず、附添婦さんにも敵意を持たなくなった。

「それでセンセイは命の恩人だと今でも思っているのだ。」

これには全く文字通り転倒する程面喰い、穴があったらもぐり込みたい思いとは、このことだろう。ただ思うのに、当時路郎先生が大病の後で皆が心を痛めていたころでもあったし、川柳家の頂点にある大切な御仁に、万一どうのこうのがあってはそれこそ大変だという私の川柳人としての心からなる悲願が、しっかり握り合った二つの掌を通じて交流したのかも知れない。有り難いことである。

巧みな話術に魅せられるように酌を交わしている間に夜もかなり更けた様子。それにしても脇田夫妻が御帰館になったのは九時ごろ。この後は二人でほんとの差しになり、話の花はまだまだ咲き乱れる。それも結局は川柳界のこと、川柳家のこと、ひいては生れ出る「川柳塔」のゆくすえを、くり返えしくり返えし案じて下さる熱情がほとばしるのである。

日中の暑さにひきくらべ、浜に近い夜風はさすが肌にもしっとり冷たく、体のためにもよろしからずと、つきぬ名残りを惜しみつつ寝に就くことにする。深更十二時に近い時間である。

翌朝は私の出勤の都合で、あとは小石にまかせまだお寝みの間に家を出た。しみじみお別れの挨拶も申上げず失礼して終った。

次の晩、昨夜と同じ庭の食卓台でいつものとおり一人静かに酌みながら、いろいろ耳底に残るものを反芻していると新しく瞼の裏に浮きぼりされて来るのであった。そして「川柳研究」の単語が活字でなく、三太郎さんのなまの声となって蘇ってくるのである。

「初心忘るべからず　であるが
また　初心脱すべしでもある」

（以上）

川傍柳初篇研究

（二　九）

377　**真鍮の花瓶へ斗り松を立**　　眠狐

清＝上野・池の端の金魚屋、真鍮屋市右衛門に関係はないか？　御教示を。

藤井＝不解。真鍮の花瓶は、仏具か。だとすると、めでたい松を、仏具の花瓶にばかり立てる、この家は、不幸続きだ、とでも言うのか？

川端＝「嬉遊笑覧」に「しんちう屋市右衛門とて、かくれもなき金魚銀魚を売る店あり……」と出ているから、その金魚の飼育池に松を立てたのではないか、とこじつけてみたのだが……。

高須＝仏具でなくても、真鍮の花瓶はあったであろうし、不幸の家で松を立てる、といい

岡崎＝不詳。

うこともなかったであろうから、こういう流儀が、何かあったのではないか？　三面子先生は「遠州流の家元」と言っていられるが？

前田＝真鍮の花瓶が珍らしいので、それにばかり松をいけた、と平明に解す。他意があっては、面白くない。

丸＝荒神松か？惣金具のヘッツイを持つ親分の家には、荒神松を立てる「真鍮の花瓶」があったのではないか。それにしても「ばかり」が落ち着かない。「守貞漫稿」には、京坂は花瓶に立てるとあるが、江戸のそれには触れていない。

岡田＝大体前田説でよかろう。松は、他の花瓶より、真鍮の方が似合って、いかめしく見える（また安定感もある）から、であろう

378　**なミよりハ十ケ年余の娘也**　　**水　砥**

岡崎＝この「娘」は踊り子の異称。既出109十ヲばかり大キな袖でかくす也と同様、大年増であるが、振袖を着飾って、姿だけは娘を装っている。

清＝賛。相手は、主に留守居役だが十ばかり留守居は年を買いかぶり（タル二四）三十振袖が留守居を化かすなり■（玉柳）と、常に十歳ぐらいはサバをよまれているのである。

高須＝「並よりは十カ年余」とは、ずいぶん妙な言い方だが、それで「十年若く見える」と言うことなのか？

丸＝普通の娘よりは、十以上も年とっている娘（なりふりだけは）というわけ。

岡田＝賛。

高須＝と言うと、この妙な表現は、扮装で年を多く見せている、ということだったのか？踊り子は余り若くては困るので、年のサバヨミは「上へ」ではなく「下へ」であったわけか？

379　**損の仕ついで鞠場から女郎買**　　**一　甫**

岡崎＝蹴鞠は、公卿の遊びだったが、後には江戸市中でも流行し、洲崎の料理茶屋桝屋では、構え内に鞠場を設けたほどであった。その蹴鞠で、勝負の仕ついでに

鞠がくづれて猪牙舟とかわります（拾七）

と、帰りは吉原へ女郎買いに繰り込む、ようなことになった。――なお、註によれば、この句は「藐姑柳」（はこやなぎ）の2才には

損の仕序鞠場から丁へ行　　大　八

と出ている、ということであるが、その句集は、天明五年刊のはずであるから、この集より六年後のことになる。

藤井＝蹴鞠をした江戸人種は、今のゴルファーに相当するから、今ならさしずめゴルフ帰り、というところであろう。

高須＝ケマリでカケをして、その損のしついでに、そこから女郎買いに行った、という句だが、その「女郎買い」という表現が、妙に露骨なのは、「マリバ」という高級なものに対する露悪趣味であろうか？

丸＝賛。

岡田＝礎稿のよく調べられているのに、敬服した。

（**丸　十府・岡田　甫★川端柳風・高須啞三味・前田喜代人・岡崎重義・清　博美・藤井和雄**）

―「川柳雑誌」八月号のつづき。（次号からまた本誌を飾っていただくことになりました。）

―編集部―

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八

しっかり やれよと 激励の 花束

（順不同）

創刊によせて

椙元紋太

新しく「川柳塔」が生まれると承り、心からお喜びを申し述べたいと存じます。川柳雑誌第四五九号の「柳界展望」で、路郎主幹本葬の際、中島生々庵氏が「指導者亡きあとの不朽洞会は、川柳界発展のため力を結集―」云々と申されたとの条りを読みました時、私は、大丈夫、安心という気が致しました。

川柳界の発展を願うてやまない私共は、一つの会、一人の柳人でも、うしないたくはありません。ですから、故人の遺志により、と聞きました時は、何故と　？がすぐ頭に閃めきました。無執無着と申しますか、ずいぶん思い切った所置をとられたものだと、驚きました。ほんとのところ――。

しかし、今から愚考しますと、ざつくばらんに「君達は皆、立派に一人立ち出来るんだから、僕なきあとは過去に捉われることなく自主的に起ち上がることだ。いいかね」つまり、門下諸氏の力を信じ、これからの時勢を洞見した上での決断―妄りに憶測することは不遜ですが―私はそう思えてなりません。

今までの川柳界は、対社会宣伝の態勢で歩んで来たといえますが、この辺で内部をじつくり反省し整頓して、より重厚な、誠意の溢れる川柳界に転向する時期が来ていると思います。二百年前の人々が、作句のし放しでのんびり楽んでいる間に、狂句となり明治時代で滅びた。私共はその轍をふみたくない。

趣味でも楽みでも、多くの人材が本来の能力を発揮する社会は発展します。川柳界とてそれ以外のものでない筈です。その点今一歩前進したいもの。（堅い文句になりました）

私は今年七六才過日十何年ぶりに男の外孫を儲けました。その顔をじっと見ていると何もいうことなく、ただ達者で育てよと念ずる

のみ。以上、清新な感じの「川柳塔」創刊を喜び、粗末な文ですがお祝いの言葉と致します。

好敵手歓迎

近江砂人

ご創刊おめでとうございます。

ことしは川柳界受難の年—路郎氏のご逝去「川柳雑誌」の廃刊。つづいて水府氏のご死去と悲しいことや、寂しいことが続きました。その中へ颯爽と御誌の登場は何といっても心強い感じがいたします。

路郎氏と水府氏—まことに好敵手でありました。このお二人の競争が、関西柳壇を盛んにし、全日本柳界の嘗てない今日の隆昌に寄与したといえぬことはありません。

勿論その底にはお二人の熱烈な川柳愛があった事はいうまでもありません。

水府氏が毎日新聞に連載された「川柳十話」に、日本の川柳人口は十万といわれている—と書かれた時、ある雑誌で「十万はすくない、百万と称しても不思議でない」という意味のことを書かれていました。

その人の川柳人口は、川柳作家の人口でなく、川柳愛好家もふくめての人口らしいのですが、川柳作家十万は、日本人九〇〇人に一人ということです。大した作家群だと思います。しかしそれを尚集約して第一線の作家、指導者ということになると、愛が二つ位なくなった川柳界が想像できます。してみると川柳界は狭い狭い世界です。

お互に主義主張があって結社を組織しているのですから、仲よくといっても限界があるのは判ります。だけれども、この狭い川柳界のことですから、お互の話をよく理解しあって十分意見を咀嚼したいものです。

御社と番傘川柳本社とは、やはり良き意味の競争相手でありたいと思います。競争のないところに発展はないのですから、大いに好敵手として仲よく川柳界発展につくしたいと思います。

心から御社の御隆盛をいのります。

期待する

堀口塊人

句集「私達」の人々が、改めて、川柳塔社を結成し「川柳塔」を発行されることになった。いま迄、川柳の道ではきびしい路郎師の下に育てられた方々であるから、さぞかし、すばらしい作品が発表されることであらう。まことに目度度くお祝申上る。

モンテーニュのエセイに「もしわれわれの顔が似ていないなら人間と動物を区別することはできないだろう。だが、もしもわれわれの顔が違っていないなら、人間と人間を区別することはできないだろう。」と云う一節がある。私は、これをそっくりそのまま流用して「もしも我々の句が似ていないなら川柳と俳句を区別することはできないだろう。だが、もしも我々の句の一つ一つが違っていないなら、作品と作品を区別することはできないだろう。」と言いたい。

川柳は、その類似性に重きをおけば、すべて伝統的な文芸である。しかし、若し、その創作性に重点をおけば、すべて革新的な作品が生れて来るにちがいがない。この十字架の中心に、揺られているのが作者個人の運命である。川柳に志すものは新旧を問わず、好むと好まざるにかかわらず、この運命から逃れることは出来ない。「川柳塔」の同人諸君、また然りである。創刊後しばらくは、おそらく、路郎氏の偉業の継承。と云うかたちで、発展するであらう。しかし、いつまでも、偉業の継承、だけで、つづけられるであらうか。今まで指導されていた不朽洞会員が、今度は指導する立場に脱皮して行くのである。そこには、作品の生長と共に必ず、「川柳

塔」として、新しい意義の発見、がなければならぬ。それがなければ、何がための新雑誌発行ぞや、と云うことになる。川柳塔社同人諸君は必ずや、この問題を解決してくれるであらう。私は、その日をたのしみに、期待している。創刊お目出度う。

お祝い

紫痴郎老人

路郎主幹の亡きあと「川柳雑誌社」の皆さんで「川柳塔」を発刊し、大いに川柳のため御努力くださる事になりましたのは、柳界のため祝福すべき事で、この老人は双手をあげてお祝を申上げる次第である。

それにつけても一二の老人のお願いがある。第一形の大きいのはいろいろの点で不便があるから小形にして頂いて紙質を良くし文字を明らかに読み良くして頂きたいのである

又同人制の外に開放門を作り、「川柳塔」へ二十句以上投句の方には自選句五句の掲載欄を設け、広く新人を集めて頂いて、秀いでた新人の門戸を設けて貰いたいのであります。それはテレビがノド自慢からすぐれた唄い手を発見される例に習いたいのであります。無学の世界的詩人のある事を知った我々はその点も考慮に入れて頂き、新人発掘にご努力をお願いし、「川柳塔」のご発展を心からお祈りします。

私が明治四十年以来、大阪の「葉柳」の人々と意気が合いまして「矢車誌」を下谷から荷十君と出し、五ツの筆名で、人も無げに柳界を評したてて、問題を起しつつあると、大阪の柳人から盛んに句を寄せられ、あたかも大阪の雑誌のようであって竜郎さん（水府）も路郎さんも句を寄せてくださって頭の良い所を見せてくださったが、中程から竜郎さんは雑誌経営上から本格川柳に転じられ大衆誌を盛んとされたが、路郎さんは詩川柳を最後まで主唱され通されたお志をついで皆さんからもさらに新しい方向に前進して頂きたくお願いして老人のお祝いの言葉とさせて頂きます。

出なおしの心意気で

石原青龍刀

いま、ある一部の人から川柳滅亡論が言われている。その発生のキッカケは路郎先生の死であった。もちろん川柳がそのために滅亡するわけはないのだが、川柳のマスコミ文化界における声望は路郎、水府といった大物の存在によってかち得たもので、川柳という文芸そのものの力ではないという、冷厳な批判がその裏にあるわけである。

「川柳雑誌」の廃刊を遺志とした路郎先生の心意気は、いさぎよくリッパである。これについて多くを語る必要はない。その門下不朽洞会員諸君が、新しく柳誌「川柳塔」の発刊を決定したことは、門下としての同志的結束と、発表機関の必要に応えるため、極めて当然の措置とおもう。新生「川柳塔」が「川雑カラー」を継承するであろうことも容易に期待されるが、そのこと自体に問題はない。問題があるとすれば、路郎先生の「川雑」において、おそらくは「念願してはたさざりし」作品上の清新発らつ化を具現するかどうかということである。ぼくの管見によれば、路郎先生は「経営」のために、先生本来の詩人的文芸意欲を多分に抑制し、心ならずも、通俗川柳を寛容して、量の増大保持につとめられたようにおもわれる。それは先生のおそらくは空前絶後でもあろうところの「プロ川柳」宣言と不可分ではないとおもうが、新生「川柳塔」は、それをそのまま継承する必要はなく、「経営」よりも文芸本位の活動に主力をそそぐことができるのではないか。

もしそのようなことが、ぼくの管見からの希望にすぎないとすれば、ぼくとして何も言うことはないのだが、とにかく新生「川柳

塔」は、路郎一門の「出なおし」という意気ぐみをもって、柳界に清新の気をもたらすべく、大いにハリキッてやってもらいたいということだけは、まちがいのないぼくの願望であり期待である。

遺訓の実現を

三条東洋樹

柳界の巨星麻生路郎先生逝去の報を受け取った時の驚きもさりながら、更に多年先生が身命を賭して育てて来られた「川柳雑誌」を、故人の遺志によって廃刊すると聞いて、新たに悲しみが胸にこみ上げて来た。口に出しては言われなかったけれども、永年雑誌発行のために生命を削られた先生と、一切の家庭生活の享楽を犠牲にせられたであろう麻生家のご苦労が、ありありとわかったよう気がしたからである。

雑誌を出すという事は、至極簡単であるが、責任を以ってそれを維持することはなかなかの苦労である。小さなグループ的な雑誌なら、嫌になれば廃めてしまえばよいが、少なくとも全国的なスケールを持つ雑誌ともなれば、責任上そう簡単には廃められないから、知らず識らずのうちに大きな犠牲を家庭に及ぼし、わが生命さえ縮めるものである。

この事を充分知り抜いて居られる不朽洞会の皆さんの手によってこの度「川柳塔」の名も新しく、雑誌を出す事に決ったと聞く。寔に欣快である。これでこそ路郎師の教え子であり、不朽洞会員の気概と面子である。

言うまでもなく不朽洞会員には中島生々庵を始め北川春巣、若本多久志、川村好郎、西尾栞等多士斉々である。故師の遺訓「いのちある句を作れ」を今こそ実現して貰って、改めて柳界に雄飛されん事を切に希む次第である。

「川柳塔」発刊を祝いて

大嶋涛明

創造、創作即ち物の生れると云うことはまことに愉快なことである。

惟うに去る七月麻生路郎先生が逝去され、寔に哀しい極みであったが、続いて「川柳雑誌」もまた此の世から姿を消すと聞き、さらに一段の淋しい思いであった。「川雑」には多士済々であるのに何故続継されないのであらうか、と聊か奇異に感じて居った矢先、中島生々庵、清水白柳その他不朽洞会員の方々によって、新たに「川柳塔」が発刊されるお知らせを受け、「さては」と納得出来たと同時に「よかった」と安堵の心地がしたのでありました。そして新刊誌を「川柳雑誌」とせず、名称も組織も改められたことは、路郎氏が「川雑」を存続させるように遺言されたのでない限り当然のことで、此の際路郎氏のものは一切氏に返上することが礼儀であらうと首肯いたのでありました。

組織も変え、名も改められることは、取りも直さず、旧踏を脱した新しい息吹きによって発足することであって、「川柳塔」が幹部諸氏の新たな理想、新たな主張の下に運営される、そこに大きな嘱望が持たれます。政治にしても、事業にしても、その主脳の交代に依って、政策なり企画が革まり、斯くて生気を産むものであることは言うまでもない、此の意味において私は「川柳塔」が古い衣を脱ぎ捨て、新しい草鞋と穿き替えて出発されたことに賛辞を呈し、心から祝福すると共に、今後の御活躍に大きな期待をかけるものであります。終りに幹部諸氏の緊密な御協力と、たゆまざる御健闘に依って「川柳塔」がすくすくと育ち、愈々御発展あらんことを祈念し、お祝いの言葉と致します。

日の出へ挙げた皆んなの手が揃い　涛明

よき名よき句に

栄光あれ

布部幸男

「川柳塔」とはいい名を付けたものです。仏教でいう「卒堵婆」を略して「塔婆」といわれ、梵語から出たものといわれます。土又は石を石層、九層、十三層などに積み上げ、中に経を納めるように造ったものです。

「川柳塔」の場合はもちろん十七層が原則というところでしょうか。そのうえ

雲の峰という手もありさらばさらばです

という麻生路郎さんの「遺作句帖」のうちの一句が、なんとなしに辞世のこころを表現しているようですし、私はその「雲の峰」と「塔」の位置や在り方に、川柳雑誌の新しいスタートを思い到るのであります。

今日只今の川柳壇ほどいろいろな気流が渦巻いているのは、過去に見られなかった現象です。みんなが自由自在な未熟な詩論を応酬している間に、かんじんな作品練磨のポイントが軽視されているようです。新鮮な魚菜がありあまるのに、かんじんの板場さんが庖丁の持ち方も勉強せずに、料理の本の活字でいいあっているように思われます。

路郎さんの人生は川柳作句に貫かれてきました。だから言われること、書かれることになんとなしに冒しがたい実在の力が感じられたのでした。

不朽洞会員という「川柳雑誌」のバックボーレンが路郎さんの精神と歩み方を継承されることは極めて自然であります。

「川柳塔」が旧い表現でおそれいりますが、「衣鉢を継ぐ」という一路を守ってゆかれるふうなら、川柳界にとっては、それが大きい光明になることは当然であります。

路郎さんの精神を生かしてゆくということが、混沌としている川柳の行路に一つの指標となることはうけあいです。良識あふれる川柳塔の作家群に、私は明るい希望をつないで、一歩一歩と堅実な大地を歩んでゆかれることを希求いたします。

ほんとうに「川柳塔」とはよき名を得られました。おめでとう。

（在京都市）

不朽洞の

灯は消えず

福永泰典

七月に麻生路郎氏、そして八月には岸本水府氏と、大阪在住の両巨星を相次いで失ったことは、わが国の柳界地図を変貌させるにたる大損失であった。

路郎氏の主宰される〈川柳雑誌〉は、他の同人雑誌と異なって、つとに営業誌を標榜していられただけに、特異な組織と活動力をもって斯界に重きをなしていられたが、九月号限りで廃刊ということは、氏の意思とはいえ意外の感に打たれた。いまにわかに歴史のある〈川柳雑誌〉を失うことは、われわれとしてもまことに残念であり、不朽洞会員諸氏の動きを注目していた次第である。

こんど清水白柳氏からのおたよりによって、不朽洞会員諸氏が相はかって〈川柳塔〉の創刊となったことは、路郎氏の川柳における偉大な足跡にかんがみて当然のこととはいえ、喜ばしい限りである。

路郎氏の努力と功績を受け継ぎ、顕彰する意味にも、大正一三年以来燃えつづけてきた〈川柳雑誌〉の灯を守る〈川柳塔〉の責任と使命は重大であると言える。〈川柳塔〉は言うまでもなく、不朽洞会員作品欄のタイトルであったが、それをもって社名兼誌名とされたことは当を得たものと思う。

不朽洞会員諸氏の今後いっそうの〝和〟と〝協力〟によって、文字通り不朽の精神を発揮し、立派に成長せられることを、柳界のためにも衷心から希望してやまない。

（平安川柳社同人）

長く続くように

桜井六葉

いずれは思いながらも路郎氏の訃は残念でした。こんど川柳塔をお出しになりますよし、御喜び申します。たしか白柳さんは私共と同郷だったと記憶しています、若くして亡くなった友帆さんとともに、—。だから私はあなた方に特別の感懐を持っています「川柳塔」長く続くように祈っています。麻生路郎氏の足跡が多きかったために、皆様の御苦心もうかがわれます。私はともかくも「番傘」に籍をおいていますので何かとお力添えする機会に制約を受けることと存じます。

一つの川柳雑誌を続けてゆくことは、大阪は広いとは言いながら、いばらの道が前途に横たっていることと存じます。それを克服して川柳のために戦って下さるようのぞみます

私はいまの川柳家の向上をというよりも川柳の向上を念願しているものです。今は入れられなくとも将来に望みを持っています。

私は主張する代りに私の「自選百句」を近日御送りいたします。よいとする人、悪いとする人、おそらく二分することだろうと思っています。

麻生路郎さんも惜しいと言えば惜しいと言われましょうが、どうせ人生百年までは保てないものです。水府さんも亡くなりました、これからは従来に増して川柳結社、雑誌の発行は、より繁った茨の道を行かなければならないかと思います。

若本多久志さんも同郷の人です。よろしく御伝えを願います。

余談になりますが、路郎氏が亡くなったとき北国新聞へ原稿紙八枚程の追悼文を書きました。近来、とみに川柳家の物故者が増えました、尤も私共が未熟な頭で活動した二十代と今の川柳界とはまるつきり変っていますので、これは止むを得ないことでしょう。

だから、これからの川柳と言い、川柳雑誌と言い、よいものが出なくてはなりますまい、「川柳塔」は恐らくこの期待を裏切らないであろうことを信じています。

川柳塔への夢

榎田竹林

路郎先生の芸術的の血が漲っていた「川柳雑誌」の続刊とでもいうべき〃川柳塔〃がそのゆかりの人達の手に依って発刊されることは、まことに喜ばしい。

路郎先生の訃に接した時、直ちに小誌静岡川柳の巻頭に〃学者肌の川柳家〃といったことを交えて私の寸感を述べて置いたが全く学者肌という文字がぴたりとすると共に、年齢を重ねても常時若々しい心の持主であったことは、その句にその文に衆知のことである。

往年当地で静岡観光全国川柳大会を催した際、全国一流の大家達にその宿題選を依頼し路郎先生もその一人であったが、その川柳大会の行事一切が終って、帰阪される日、選者への謝礼として渡してあった金一封をそっと私の手に渡して〃これはまた静岡川柳の何かに使って下さい〃と至極自然に返えされて帰阪されたものだが、金銭に括淡とでもいうのか、この辺にも路郎というよき人と為りの一面が滲み出ていると思う。

このよき一偉人の心血をそそがれた十七音文学を引継がれる〃川柳塔〃の人達のますますふくれ行く夢に多大の期待を寄せるものである。

俺に似よ俺に似るなと子を思い

と、路郎先生もはるかに〃川柳塔〃の成長を見守っていることであろう。

（静岡川柳社主幹）

以和為貴

冨士野鞍馬

「川柳塔」は、「川柳雑誌」の継続ではなく、「路郎先生の恩に応える」という趣旨で、旧不朽洞会員が、新しく創刊されたのである。その意図は美にして壮である。首途に際し慶賀祝福申しあげる。

「川柳塔」は「川柳雑誌」で、不朽洞会員の作品発表の場のタイトルであった。いい題名だと感心していたが、それを新誌名にされたことはまことに適宜である。しかし新しい「川柳塔」は「川柳雑誌」のお得意をもらって開業するというのではなく、何もかも新規に発足するということでありたい。そこに強力、発展の要素がある。こうして「川柳塔」は、必ず川柳を社会に大きく押し進めるであろう。

「川柳雑誌」は、路郎さんが「われ一代」と遺言されたときく、まことに路郎さんらしいお考えと敬服したのであった。そこで、不朽洞会員が、新しい柳社を樹てて、新しい柳誌を刊行されることは、極めて自然のことである。そこに路郎師に報恩の趣旨も顕現されるのである。しかし「川柳塔」は「川柳雑誌」とはちがった体質のものである。はじめは、旧不朽洞会員ばかりであろうが、発展につれて、新しい好士が続々と加わり、組織の上でも強固な、社会に対して有力な、大きい存在を示現されることとおもう。

いずれ「川柳塔社」には、主管者が必要であるが、恐らく社規を制定し、それによる選挙できめられるであろう。そこに民主主義的の組織の強固さがある。その強さの基は「和」である。川柳塔社の各位「和をもって貴し」とし、初志貫徹、大発展を遂げられんことを念願する。

創刊号に寄せて

大森風来子

川柳雑誌は廃刊となると聞いて一時は唖然とした。それも路郎先生の遺言であっただけに決定的な事実として私の胸をしめつけた。しかしそれから数週間を経て、路郎門下生たちの結束によって「川柳塔社」が新らたに発足すると聞き、私は小踊りをして喜んだ。よくぞ決心してくださった。それでこそ地下にいる路郎先生も目を細めて喜んでいるに違いない。

私はかって川柳雑誌社岡山支部の幹事ならびに不朽洞会理事として川柳雑誌社のために働いたことがある。当時、雑誌のあり方についていろいろと進言した。だが私の進言は一つとして採用されなかった。その一つに雑誌の菊判がある。次に、雑詠の投句は十句がよいということもいった。第三に、課題吟の投句は、各題三句でよいとも進言した。そのことごとくが問題にされなかった。しかし今も私はこの考え方に誤りはないものと思っている。

このたび新発足する川柳塔社に望みたいことは、川柳雑誌の踏襲であってはならないということです。新時代の要求するブックサイズによることは勿論のこと、新鮮にして、ハッラツとした内容を見せてもらいたいと思う。路郎氏の屍をのりこえて進んでこそ、先生も地下で、でかしたぞと喜んでくださることと思う。

私はもう川柳塔社の同人として参加することはできない。私も曲りなりに先生の訓育を受け、小さいながらも一結社の代表者として「川柳ますかっと」の発行を続けているからである。こんにちの私のあることは、すべて路郎先生の賜である。そのご恩は一生忘れることはできない。したがって先生の門下生たちの「川柳塔社」の活躍と発展を私は心からお祈りするものである。

斯界のために

池田可宵

川柳雑誌のあとがどうなる事かと注目をひいていた時勿然と旧不朽洞会員の方々によって「川柳塔」が発刊される事になり、これを以って恩師のおもいに応えんとする構えは誠に壮たるものであり感激の外ありません。

故麻生路郎先生と岸本水府先生とは曽っての剣花坊、久良伎の両翁に必適する存在にして川柳史上動かぬ指導者であり貢献者でありました、その両雄を僅々一カ月のうちに失った事は東西をとわず返す返すも柳界の大損失の年であったといわねばなりません。

昭和四十年は各界大もの異変の年でありました。政界でも大野伴睦、河野一郎、池田勇人と続けさまに巨星が落ち、それ等の党派はその足跡を継いで張り切ったものの日ならずして分散作用の風に曝されはじめた今日この頃ふとこんな事を思いました。

故人の業をのり越えて強く大いなるものが生れ出ることに勿論異論はないが、いつの間にか当時の情感、意気が乱れて群雄割拠の姿に変じて夢破れただけでなく元よりも弱体化した例はすくなくなかったのであります。

今一ばん考えられることは少しでも広い範囲の団結によって川柳以外の文壇に肩を並べ認められる内側への努力を要する時であります。「番傘」も「きやり」も「川柳塔」も「ふあうすと」も「平安」も一丸となっていわゆる国外貿易とも云うべき竿頭に立つ日が来たように思います。

いまにしてこれを改めなければ百年の悔を更に加えて舌を嚙むでありましょう、多くは云わなくても、俳句短歌は取り上げられて川柳が置きざれにされている雑誌新聞はとても指を折る暇はないほどであります。

願わくば新発足の「川柳塔」に大いなる期待をかけておよろこびに代える次第であります。

「川柳塔」創刊を悦ぶ

高須啞三味

大先輩麻生路郎師のご逝去は、日本柳界のための大損失であって、今さらに悔んでも悔みきれないものであるが、その逝去と共に、その生涯をかけて来た「川柳雑誌」が、姿を消すということは、第三者たる我々には、どうにも納得できないものを感じる。

路郎師が、病院から帰られて、最後の編集をされた、と想像される、

「川柳雑誌」七月号の表紙には、今までに見られなかった、

〝川柳の最も権威ある雑誌〟

という標語が記された。如何に路郎師が「川柳雑誌」に自分の誇りをかけていたか、その標語が示している気がするのに、師の死と共に、その誇りまで消えてしまうというのは、如何にも寂しい。

と歎いている我々の前へ、旧不朽洞会の有志諸君が、師の衣鉢を継いで「川柳塔」を出して行く、という快報がもたらされた。

我々門外漢には、その詳しい経緯は知るべくもないが不朽洞会の中堅分子が、我々と同じく、路郎師のここまで愛し培んで来た、この柳の巨木の、このまま枯れしぼむのを眼前に見るに忍びず、有志を糾合して、たとえ形態は変えても、その精神を継承して行こう。

と敢然決意されたことは、我々の快とし、双手を挙げて賛成するところで、はるかに有形・無形の援助を惜しまないことを、この「川柳塔」創刊を計画された有志に、大声で告げたい気持で、この稿を送るものである。

希くば、この「川柳塔」の、巨然と東京タワーの如く、いや通天閣の如く大阪の空高く、雲表を抜いてそびえ立ち、亡き路郎師の

志と誇りを永久に守り抜かれんことを、衷心より望むものは、敢えてボク一人ではないことを、諸君よ銘記されたい。

なお、路郎師は、常に前進開拓を怠らなかったと共に、源泉探究も忘れず、絶えず古川柳に強い関心を抱いていられたことは、「川柳雑誌」上に古くは「武玉川」の輪講を数年に亘って連載し、近くは我々の「川傍柳」初篇の研究を、是非にと懇望されて、毎月四頁ずつというスペースを割いて連載されていた事実に依っても、師の川柳愛は実証される。今後「川柳塔」に依って、師の志を継がれる方々も、どうかこの精神だけは忘れないでもらいたいと、ほんの少し我田引水的希望を述べて、このハナムケのことばを結ぶ。

（四〇・八・一七）

「川柳塔」の創刊を慶び

北村白眼子

不世出とも謂うべき偉大な川柳作家、麻生路郎先生がわが全柳壇へ不朽の大功績を遺されて、ご高齢とは申せ忽然ご昇天遊ばされた事は全柳壇人の今に痛惜して措かぬところでありますが、此度、故先生傘下の不朽洞会の幹部諸氏の企画にて故先生の衣鉢を継がれる柳誌「川柳塔」の創刊を見られる事は吾人欽喜慶祝してやまぬところであります。

「追悼号」を含めて実に第四百六十号を発刊された「川柳雑誌」の大業蹟と盤石の礎にどっかと腰を据えられて全柳壇を風靡する大柳誌に発展させられる事を嘱望祈念する老生であります。至嘱！。

尚聊か敷衍させていただくが、老生は当地の柳誌「はこだて」八月号に先生追悼の

世を辞するにも素晴しい句を遺し　白眼子

を献詠しましたが、同誌九月号にも、昭和三年と同五年に再度本道に来杖された故先生のプロフィルと全柳壇への御業績を概記して追悼文にしたのでありますが、その稿に書き洩した一エピソードを茲に披露させて貰う。

昭和五年八月函館にて開催された第二回の「海峡親善川柳大会」に当時函館柳壇の大御所だった故亀井花童子氏の招聘に応じて関西柳壇の代表選者として路郎先生が遙々ご出馬下すったのであります。

此時の選者は川上三太郎、矢野錦浪（東京）麻生路郎（大阪）神尾三休、亀井花童子（函館）小林不浪人（青森）尾山夜半杖（札幌）の七先生でしたが、大会後の旗亭「島屋」での大懇親宴には

春を趁う夢にうれしい便り来る　錦浪

夕桜とんぼ返りがして見たし　路郎

この両先生のご近作を名妓にレコードに吹き込ませ、舞踊の師匠に振附させて、宴なかばに華かに踊らせて興を添えたのである。

「春を趁う」を老妓鶴子が余韻ジョウジョウたるメロディに乗って静かに舞いおさめると次いでグラマーの市奴が潑辣たる若さを発散させての絶妙のポーズで見事に踊りぬき満座の絶讃を博したものでした。

故路郎先生を憶う時、いつもこの時の先生のご満悦なお笑顔を瞼に泛べる老生です。

飛んだ余事を申述べ、失礼御免下さい。

川柳塔へ望む

河野春三

〈川柳雑誌〉が永い歴史を閉じて、ここに皆さんによって〈川柳塔〉が出るということを承わって、先ず御祝いを申上げる。

思うに他の柳誌の発刊と違って、本誌の出発は事情が違う。路郎氏の逝去によって、その主宰せられていた不朽洞会員が遺志をついで出されるというのであるから正しく〈川柳雑誌〉の衣鉢をつぐものといってよい。と思う。

路郎氏は明治、大正、昭和三代に亘る川柳作家であって幾多の功績を川柳界に残されたが若いころから進歩的な考えであった事は〈後の葉柳〉〈雪〉〈土団子〉等〈川柳雑誌〉の前身と見るべき雑誌を見るとよく分るのである。

〈川柳塔〉はどのような方針で進んで行かれるものか、僕には分らないけれども、少くとも路郎氏の川柳に於ける文学的向上につくされた初志を忘れては意味がないと思う。

もとより、〈川柳塔〉が〈川柳雑誌〉そのままの形体をとって行くとも考えられないが、唯〈川柳雑誌〉の真似をしただけでは意義がない。同人諸氏の時代的識見と感覚によって、新しい角度からユニークな柳誌として出発、発展させられることこそ、路郎氏に報いる道ではあるまいか。相撲界で「恩を返す」というコトバがある。胸を借りた先輩力士に、成長してから真剣道場の土俵の上でその力士を負かせてこそ、恩を返したことになる。〈川柳塔〉も〈川柳雑誌〉を遙かに凌駕してこそ、恩を返えすことになると思う。

祝　吟

大いなる晴れ
川柳の朝ぼらけ

（可宵）

最初が肝心であり、「初心忘れず」という覚悟も大切である。路郎、水府両大先輩を失って、関西柳壇も大変の時を迎えている。この時に〈川柳塔〉が船出することは、新しい意味と意義がある。切に地味な前進を祈ってやまない。

永遠に生きる
ものへの祝福

岡　橋　宣　介

私たち川柳文芸にいそしんでいる者の上に、一つの大きな指標的な存在であった、麻生路郎先生のご逝去は、巨きな力の支えを失った感が深く、惜みてもあまりある次第であります。

これに加えて、「川柳雑誌」が、先生とその生命を俱にして、終刊となるとのことを聞いたとき、川柳にいそしむ者として、何とも言えぬ寂寥をどうすることも出来なかった。同時に、そんな筈はないと、一つの忿懣に近い感情が頭の中をかすめ走った。

川柳文芸の普及と向上のための聖なる努力の結晶が、先生の死と共に消えて去る、そんな馬鹿なことがあってなるものかと思った。果せるかな、錚々たる数多の、先生門下の人々なれば、何でそのまま過しましようや。生涯をかけてこの道のために手がけられた「川柳雑誌」を、終刊とする故人の遺志は尊重するとしても、六十年をこの道のために尽された先生の、尊く偉大な業績を、そのままに終らせる筈はなかった。そして、ここに、当然に「川柳雑誌」改題「川柳塔」が、私たちの尊敬する中島生々庵、北川春果、西尾栞、若本多久志の諸氏その他多くの、先生生前の幕僚によって、華々しく発足されたのであります。

「川柳塔」は、新たに誕生したかの如くであるが、先生の遺産とも言うべき「川柳雑誌」の段階を経た発展であるというべく、その生命は、当然「川柳雑誌」、否、麻生路郎先生の在りし日の生命に繋がっているものであると信じます。それでよいのであって、それでこそ、わが川柳文芸興隆のために、生涯をかけて戦かって来られた偉大なる麻生路郎先生は、永遠に生きて存在するというものであり、まことに、悲しみを喜びに変えるこの壮挙に、双手をあげてその前途を祝福いたすものであります。

最後に一言、短詩型川柳文芸は、旧思想のいわゆるセクショナリズムに據っては、広く向上発展しにくいということであって、「川柳塔」が同人制によって再出発されたことは、その意味においても非常に有意義であり、より以上の発展を確信して疑わぬものであります。

川柳太平記（八）

富士野鞍馬

新田義貞

——建武中興——

源義家の孫義重は、上野の国新田郡に在り、代々新田を氏とした。義重から八代目が義貞である。義重の弟義康も、上野の足利郡に在り、その子孫が足利氏である。

新田、足利の両氏は、たがいに源氏を継ぐものと内心自負していたが、足利氏の方が優勢であった。

元弘元年（一三三一）義貞は、足利高氏とともに、北条幕府の軍に従い、後醍醐天皇の行宮、笠置攻囲に参加したが、護良親王の令旨をうけて帰国したのであった。そして、元弘三年（一三三三）五月、高氏が寝返えり打って、京都六波羅の幕府出先を占領したので、義貞はおくれてなるものかと、五月八日に上野の国に兵を挙げ、利根川を渡り武蔵に入り、入間川を渡って小手差原に出、府中分陪河原で北条泰家の軍と決戦し、大勝して諸国の軍を合せ、五月十八日、北条幕府の在る鎌倉を攻めた。

その時幕軍は、海陸とも防備堅固で、攻め入るべきもなかったが、義貞は、竜神に祈願して、自ら佩びていた黄金作りの太刀を海中に投げ入れた。すると稲村が崎の海が、にわかに二十余丁干上って道が開けたので、義貞軍はそこから攻め入って、二十二日に鎌倉を占領したのである。（太平記）

海へ太刀とは鍔際の智謀なり　（九六20）
稲村が崎に一振太刀左衛門　（一〇六23）
海までがいふなりになる運のつき（拾五）
竜神も源氏の田へは水を引き　（拾三）
新しい田へは竜神水を引き　（五五14）
義貞の勢はあさりを踏みつぶし　（初10）
義貞は荒布の道を踏みわける　（六〇22）
義貞の士卒あらめでつんのめり（三二38）
ひたひたひたとかまくらへ乱れ入り　（三三27）
鎌倉の汐干鱗の仕舞なり　（一一42）
竜のこけ義貞むごくおっことし（三九2）
やきめしを三つ義貞ふみつぶし（三八18）
汐がひて東魚おさへる鍋の蓋　（三八17）

などと川柳に詠まれている。北条の紋が三ツ鱗だったので、その形を焼飯三個に見立て、また東魚は高時のことである。ここで、北条九代の高時は自殺し、頼朝以来百五十年の鎌倉幕府は滅びたのである。

六月には、後醍醐帝は京都に入られ、義貞は、従四位越後守兼上野、播磨介、武者所長官に任ぜられた。高氏は帝の御名の一字を頂き尊氏と改名し、従三位武蔵守、参議となり、義貞より上位であった。そして翌年一月二十九日に「建武」と改元されたのである。これを「建武の中興」という。

——勾当内侍——

建武二年（一三三五）七月、高時の子時行が鎌倉を奪回したので、八月、尊氏はそれを追払って鎌倉に駐在して、征夷大将軍になることを考えていた。それでは後醍醐帝の思惑とちがうので、十一月、尊氏追討の命令が義貞に下った。それで義貞は軍を率いて東下したが、箱根、足柄で敗れ、退いて京都を守ることになった。これに対し尊氏の軍勢はずっ

と優勢であった。

建武三年一月元旦は勢多の前哨戦、九日には総攻撃、十日山崎の守りが破れ、尊氏軍は十一日に京都に入った。後醍醐帝は坂本に避難された。そこへ奥州の北畠顕家の大軍がやって来て、義貞、正成軍と協力して京都を奪回し、尊氏軍は九州へ向った。そこでまた、義貞に再び、尊氏討伐の軍命令が下った。

この時の義貞には、勾当内侍という愛人があった。東国武士の義貞が、皇居に出勤している間に彼女を見染め、後醍醐天皇からもらったというのである。この愛人が居たために、軍命令があったにもかかわらず、別れを惜しんで、追撃の戦機を逸した。（太平記）といわれている。川柳の義貞吟もこれに集中されている。

官軍の総大将は朝寝なり　（拾五）
新田の陣触れまた今日も御延引（一五七1）
長追をせぬが義貞落度也　（一七38）
なからはんじやくで義貞ずるけ出し　（六35拾六）
内侍拝領後千物臭太郎　（安八義4）
出嬢ひは内侍拝領からの事　（安八宮1）
戦に出たがいいのさと内侍ふて　（安六礼8）
愁歎は杉本ぬれは左中将　（一三五1）
筑紫までどう行かれうと内侍留め（一二28）
出陣もせずに内侍とつくしなり（一五30）
筑紫へは畑でもお遣りなんしなり（一五5）
こびついて居ると筑紫の忍びいひ　（安四桜4）

筑紫は九州で、尊氏の逃げた所、畑六郎左衛門は義貞の部下であった。

楠が来ると箒を内侍立て　（三〇23拾五）
楠は美しいのをたておろし　（九8）
楠がどうかしようと内侍いひ　（拾五）
正成がどうかしやうとづるけてる　（天七・八）
こび付て居て楠にるすといい　（三〇35）
こびりついてて楠にるすといへ　（拾五）

楠正成がけむたかったようである。

勾当の内侍因果と美しい　（六12）
色に目がなく勾当に御まよい（一一六8）
勾当に目をなくなした左中将（一〇一3）
知った風勾当の内侍はめくら（一六四21）

盲人の階級の勾当にかけても作られている。

勾当の内侍よろひをひつかくし（一一28）
ねき寄らんせに義貞もくらひ込（九八31）
来なんしの見得で内侍は陣羽織（一二四3）
遊里のそれにもなぞらえられている。
勾当に見抜かれ給ふ内兜　（一四二32）
勾当の内侍兜の緒を緩め　（安四義3）
勾当の内侍枕絵初に見る　（安五礼3）

鎧櫃の中には枕絵が入れてあった。

ひとりでに滅びやせうと内侍いひ（拾五）
勾当の内侍で番が大くるひ　（拾五）
勾当の愛に南の杖が折れ　（一三八29）
こうしているうちに、尊氏は軍勢をととのえて東上するのであった。

――藤島神社――

西国に在った尊氏は、光厳上皇から、義貞討伐の命令書をもらい、延元元年（一三三六）四月、九州を出発して、大軍を率いて京都に向った。五月二十五日には、正成は湊川で討死し、義貞は二十六日に京都へ逃げ帰った。後醍醐帝は叡山へ行幸。二十九日に足利軍は入京した。叡山は義貞等が守り、十月まで戦争があったが、尊氏は和睦を申入れ、天皇もやむなく受諾され、京都へ還幸になった。尊氏は、光厳上皇の御弟光明天皇を擁立し、譲位を強請したので、後醍醐帝は不承不承でこれを認められたが、北畠親房の意見で、吉野へ遷都ということになり、これから南北朝対立がはじまったのである。そして尊氏は京都に幕府を開いた。

義貞は、尊良親王と越前に赴き、金崎城を守っていたが、足利軍に攻められ、親王と長男義顕は自刃し、延元三年（一三三八）七月二日、義貞三十八才で、藤島の燈明寺畷で討死した。金崎城では、兵糧がなくなって馬を食ったので、

かねかさきよはひ馬から喰はじめ　（拾六）

と川柳に詠まれている。なお、

なべふたと釜のふたとでいおり合　（拾六）

鍋釜の蓋南北でたたきあひ　（三三39）

と新田の紋丸一を鍋蓋とし、足利の丸二を釜の蓋としても詠まれている。

明治九年に、義貞は藤島神社に祀られ、同十五年に正一位を追贈された。

――新田大明神――

義貞が越前藤島で戦死した時、二男徳寿丸はまだ八才であったが、成長して左兵衛佐義興となった。

正平十三年（一三五八）義興二十八才の時、妻の父竹沢右京亮等の謀略にかかり、鎌倉へ行く途中、武蔵の六郷川、矢口の渡で、舟底に穴をあけておいて沈められたので、怒って舟中で自刀して果てた。（太平記）これは足利の策であったのであろう。

ちっとばか矢口で話す太平記　（拾五）

大せつにこげと竹沢ちよくらいひ（一一39）

また潤色されて、謡曲「義興」や浄るりにも作られている。川柳はまた、

呑口の有る船に乗る残念さ　（安四3鶴）

呑口が有るに義興気がつかず　（四四3）

無念さは義興底に気がつかず　（七八3）

阿伽の湧くやうに義興思し召し（明三梅5）

生きながら新田弘誓の船にのり（六七15）

渡し場でぶくぶくと十一騎　（一〇三19）

土船の狸義興ほど悔み　（一一三27）

義興は不覚と狸笑ってる　（一二五28）

お伽ばなしの狸も引合いに出して詠まれ、

御父子とも新田は船で身を果たし　（一四一10）

勾当の内侍の愛に溺れた父義貞も共に船として詠まれている。

運不運将に木の穴船の穴　（一二八31）

これはまた頼朝の朽木の洞穴の幸運と並べてある。

うなってる矢口三助栓を抜き（一四二22）

浄るりの矢口と湯屋の湯槽とをかけても作られている。

義興は地もぐりの仇天びかり（一五四11）

その後、義興怒りの霊のたたりで、謀略に加担した者は怪死し、矢口のあたりに奇怪なことが度度おこるので、義興の霊を祀り、新田大明神としたのである。そして明治四十二年には従三位が追贈された。

新田大明神は、義興の死が十月十日というので、毎月十日の縁日には参詣者多く、宝暦のころから魔除けの矢を売っていた。そして帰りに品川の遊里へ足を向ける人が多かったので、それも川柳に詠まれている。

新田の残党品川に今日も居る（一三五35）

新田様品によったら禁句なり　（八15）

品川へ沈めにかける矢口づれ　（六19）

品川へ沈めにかかる新田連　（六五32）

品川の星へ新田のそれや来る　（三三23）

色紙短冊
書画用品
大阪市北区
丹青堂
電話 七二・七三

表紙について

直原玉青画伯（岡山県御出身）

大阪美術協会委員、社団法人日本南画院常務理事、現代俳画協会顧問等々いろいろお忙しいお躰であるにもかかわらず、わが「川柳塔」のためこれから毎月御染筆頂くことになった。画伯は周知のとおり、故矢野橋村氏の高弟であり、帝展日展にも十六回入選、大阪市立美術研究所教授、大阪市立工芸高校講師を歴任され、中華民国へは数度にわたり、又最近は欧州へも旅行された。（生）

生命の一頁

麻生葭乃

「神光あれと言いたまいければ光ありき、神これを善しとみたまえり」これは旧約聖書の創世記第一章にあることばである。

光は天地創造のはじめにあった。人の生命の第一頁は驚きの精神ではじまっている。驚きとは、そもそも何であったか、それは心に受ける衝動である。光は何よりも先きに人間の瞳を刺戟した。これ第一の衝動である。そして、次々と身近かに迫って来る、物体のひとつ、ひとつは新しい驚きとなって、瞳に映っては消え、消えては映り、その驚きは際限もなく続いて来たのである。この驚きの精神は詩情を燃やす火だねともなり、韻律をそなえた発言ともなって現われるのである。

短詩型文学愛好者は片時もこの精神から離れてはならない。だが、人間は物に馴れ易い性癖を持っているので、大切にせねばならぬ驚きの精神も、いつとはなしに免疫性となり、逐に忘却されて終うのである。

この危機を救うために、私達の「川柳塔」は驚きの精神礎石として建立され、未来永劫に、その壮厳美麗な姿を誇りとすることであろうと思っている。

近作柳樽

川村好郎選
菊沢小松園選

竹原市　杉原愛鳩

おちおちと眠れなくともピンカール
枯れてゆく巨木ささえるものがなし
まだやせる余地があつたか夏をやせ
此頃の人の噂は十日ほど
市会議員こじれた縁も持ち込まれ
欠点が好きと始末におえぬ恋

大阪市　中川滋雀

香奠の中身忘れたのも混り
スポンサー付いた灯りで盆踊り
トラックで神輿も渡る人不足
値上げしたうどんに葱が一つ増え
照れば涸れ降れば溢れる文化国
まだ腹を立ててる胡瓜きざむ音

大阪市　今井章子

アパートの一間を金魚なぐさめる
恋占いして恋人のいる気持
カレンダーの裸婦ものうげに見える雨
医の言葉ある時冷たく暖かく
紫煙ふと違つた色に見えた恋

松阪市　萬濃修

帰省した子のわがままを嬉しがり
おしゃべりだなあとどちらも思うてい
先生のいびきを知つた山の宿
まだ払う所があつた月給日
どうせ買うまいと正札裏返り

鳥取県　鈴木村諷子

酒の義理欠いたを妻にほめられる
手を組むも義手は支える型に組み
欲しいか欲しいかここまでおいで助成金
女房の検閲手紙書きなおし
甘えてる女を見てる女の眼

宮崎市　野口卯之助

BGのよれば好きだの嫌いだの
そのうちになんとかします金を借り
貯金箱接着剤でまた塞ぎ

気のふれたように管絃楽指揮者
堺市　青山慶之助

温泉に来たんだからとまたつかり
思いやりだけでは彼女もついてこず
人間は忙しすぎると猫昼寝
言えるのは何時でも言えると腹に持ち
新居浜市　近藤凡生

待ちぼうけ蛙の声も腹が立ち
一本の煙草の中の独り言
貧乏を素直に生きた太い指
倖は母にやさしい妻があり
新居浜市　安藤桂仙

ブロマイド画鋲で止めてまだ嫁かず
パトロンへ犬も二号の気でつかえ
殺し屋と云う職もありサングラス
低姿勢高飛車となる客がくる
守口市　村田飄太

へちややと言えば親に似てると負けていず
音のする方へ金魚は口そろえ
鳥金魚犬も結局母が世話
戦後派はけんそんという語をしらず
大洲市　堀内暁風

長電話ビールの泡は消えたまま
落ちぶれたひけ目我から遠ざかり
遠のいた無心に安堵やら不安
痩我慢あつさり捨てて金を借り
岡山県　牛房譲士

うなだれた笹に虚心見透かされ
着替えした肌着に労をねぎらわれ
原爆忌雲一つない空にくい
まな板が妬心の音で鳴っており
石川県　塚本健二

中年が好きよと親を慌てさせ
セックス論知らないような顔で聞き
議事進行大物がいてはかどらず
最大の抵抗妻ふて寝する
大阪市　加川大然

病臥して妻は幾度か墓詣
死んでよし生きてもよしの歳になり
玩具欲しがる頃が吾子という感じ
夏休み夜店の金魚草疲れる
大阪市　岡本幸子

母の旅みやげ物屋へ行っただけ
一寸した御礼はたばこで間に合わせ
無愛想に別れた夜は気にかかり
何事も控え目でと母のくせ
堺市　井上圭太

内幕に通じ矢面には立たず
足の爪剪って平和の隅にいる
覗き窓だけで逐われる意地を売る
氷柱がやせて交渉決裂す

尼崎市　海士天樹

柩打つ釘の性根が手にひびく
愛情をご破算にする字が乱れ
倖せは十指が今日の汗握る

大阪市　藤井玄武洞

武蔵野に出れば車輪も夏の音
迎火を焚く娘は母の過去知らず
百合活けてトロ押す選炭婦と見えず

アメリカ　斎藤流路

見せてもわからない夫に布をみせ
沈黙の美しさよ金魚泳ぐのみ
株グラフにらんでみてもはじまらず

大阪市　吾郷玲人

消火器はアクセサリーのようで無事
温情はあるがお金の無い刑事
野仏に観光バスの砂ぼこり

出雲市　竹内李朋

神様の姿を捜す八足門
神楽殿大安吉の笛が鳴り
旅はよし林檎畑に月が出た

八尾市　宇佐美彰大

年老いて若気の過去が身にしゆみる
台風がそれて喜ぶむし暑さ
ブロックふえ垣根の朝顔さみしそう

大阪市　伊藤定子

B_1を夫に飲ませて朝を出し
奥さんに受話機の変わる標準語
ボーナスは分割払いと子の便り

大阪市　脇通隆

病み上りまずパチンコで運だめし
塩分を抜いた食事で夏を耐え
十姉妹かわいい卵をかくす知恵

玉島市　井上旭峯

整型をしてから化粧が高うつき
演技よく女は危機へ座りかえ
つまずいた石が教える自己過信

仙台市　平野光道

盆踊すんで冷害ふと感じ
道問えば駐在所のありか教えられ
折伏で暮せるまでにのしあがり

竹原市　三宅紀世美

戸締もなくふる里の朝は明け
自分でもおかしい位い素直な日
親ひとり子ひとり嫁の気が疲れ

神戸市　川崎志朴

百円を渡して行ってらっしゃい行ってらっしゃい
どう見ても妻の水着はいただけず
水蜜桃いなかの母をふと思い

大阪市　藤冨淀月

倒産の余波別荘の戸が締り
またアイスクリームになるあみだくじ
ありし日を想い起した師の胸像

河内長野市　森本黒天子

今更に亡き師の水茎もなつかしく
郊外の画布一ぱいに秋動く

大阪市　永田六龍子

秋立つて崖のすすきに触れるバス　高知県　山川勝子

家柄の躾を子供はそつぽ向　笠岡市　谷本鈍愚坊

墓参り日頃の無沙汰詫びる母

安売りのムードに高価な無駄を買い　大阪市　和田痴亭

災害へ次々視察は来たけれど

氷解の後の乾盃よくまわり　神戸市　吉田隆史

パパパパと呼んで貰うて高うつき

開店の前日裏から馴染客　石川県　大山雅城

怒つても泣いても見せる妓のエクボ

集まれば無色の水にも色がある　茨木市　高木繁太郎

屑籠に抛るように停年制があり

吼々の声雄々しく川柳塔デビュー　羽咋市　三宅ろ亭

久濶を詫びつつむせぶ墓参団

若いのに任かせば結構やつてくれ　塩釜市　川村映輝

骨あつて出世の番がやつて来ず

雑草のような人だとおそれられ　尼崎市　岡本昭三

脱税を代議士から教えられ

両方の上司に仕事を命ぜられ

三面鏡朝の若さを意識する　金沢市　根上杏花

小路まで舗装が出来た選挙前　倉敷市　水粉千翁

停退の日から初めた一万歩

洩れ聞いて来たお祝いに恐れ入り　大阪市　天見幸雄

朗らかさ鼻の低さが気にならず

待たされて踏切番をにらみつけ　神戸市　竹内出樹太

義理堅くきつちり届く請求書

伝統を継ぐ川柳塔若若し　大阪市　木村草々

宰相の涙はつきり那覇で見せ

一対一異性感じた部屋重し　大阪市　山田松太朗

お土産に貰う西瓜の持ち重り　青森県　岩淵一星

風呂敷の隅に小さく亡妻の文字　伊丹市　芳岡正弘

旧友も笑う持病を持て余し　大阪市　板井兎裸

半生は悔なくもなし眼鏡拭く　西宮市　船津千夏

ふるさとの老木にききたい親のこと　大和郡山市　中内孚彦

空までも冷たい戦争二つにし　松原市　佐藤勝利

汚職記事ない三面を不思議がり

近作柳樽の選にあたつて

川村好郎

「川柳塔」発刊にあたって、「川柳雑誌」に永く採り上げられ好評だった「近作柳樽」の欄を引きつづき設けられる事になりました。

「近作柳樽」は川柳塔同人以外の作家、弘く「川柳塔」購読者の一般からの雑詠を募集することは「川柳雑誌」時代と同様であります。課題吟は従来通り、「一路集」があり、清水白柳氏担当の「作句教室」があり、其の方で勉強が十分出来ますから、雑詠の方は奮って「近作柳樽」へ御投句願いたいのです。初心の方は課題吟から入られますが、だんだん進んで雑詠に着手して頂きたい。故麻生路郎先生の門下生で今日名作家の誉れ高き方々もすべて嘗てはこの「近作柳樽」に名を連ね、先生の選を受け、指導されたものばかりです。「近作柳樽」こそは我々の川柳道場であり、登竜門であります。

雑誌「川柳塔」を購読せられ、優秀作家の佳句を味読することも大切ですが、この川柳道場に投句し、先輩選者の選を受けることによって、自作自選、ひとりよがりの域を脱して、更に前進上達する事も忘れてならないのです。自分の句が活字になって誌上に載り、互いに其トップを競うことも作家として楽しい一つであります。引きつづき「近作柳樽」が開設せられるにあたって、嘗て路郎先生より、選を仰せつかった私の経験により、気のついた事項を少し述べてみたいと思います。

一、自分の句を創ること

課題吟には時には一度も経験のない、事情も知らない課題が出て、作句するのに苦労をし、想像によってやっと作句する場合があります。これもよい稽古であります。雑詠は其点自由であります。しかし雑詠は自分の句を創ることです。身辺句、写生句にしても、自分の経験、感覚の角度から湧き出た句でありたいのです。連記された投句を拝見して、この作者は一体男性か、女性か、若いのか老人か、娘さんか二号さんかと戸迷うような句に接することがあります。男性から見た女性の句を男の方が作り、社会批判の句を作られることはもとより結構であり、大に作句せねばなりませんが、サラリーマンが一度の体験も知識もない農夫自身の句を作っても読むものに感動も与えず、類句になり易く、作者自身いつまでも自分の句として書き残しておく気にもならないのです。

岡山県　**梶川瞳美さんの句**

神経のない手足の重いこと
お下げ髪いつの日我が手で編めるやら
知覚なき掌の中に溶ける雪
もう一度駈けてみたいな春の丘
笑みだけは捨てまい癒ゆる日無くとも

（川柳雑誌四五八号近作柳樽より）

上野市　辰子さんの句

襟替が迫るダラリへ未練もち
ドロドロに酔う妓を車夫は助け乗せ
朝がえり深いねむりの花街を脱け
ぶぶづけを通すおちよぼへ午前二時

（川柳雑誌二五七号近作柳樽より）

説明するまでもなく、どういう境遇の方かこれ等の句によって判るし、他の人が作り得ない境地を巧みにとらえて作句されています。少しこれ等は極端な例かも知りませんが、要するに血の通った自分の句を創ることです。生命ある句というものでしょう。

二、投句制限十句ということ

事に当り、思いに触れ作句しておき、投句締切期日が迫ってから、それ等の句から十句を自選して、期日に遅れぬよう投句して頂きたいのです。期日が切迫して、あわてて作りもう三句だ、もう二句だとともかく十句を竝べて投句したのでは決して佳句は得られません。抜ける句が出来たとしても、それはあくまで遇然であって、それを常套手段にしてはならないと思います。一句や二句だけを投句する方がありますが、これでは選は出来ません。少くとも五、六句以上は見せて頂きたい。以前は二十句と制限されていましたが、類句を二十句竝べるより力のこもった十句が欲しいのです。余程作句熱の燃えてる方、場合でないと二十句の佳句は至難です。

三、原句は書き残しておくこと

投句された句は必ず手元に書き残しておいて下さい。そして誌上に入選発表された時、どの句が入選したか、どの句が没句になったかを批較研究することです。選者が句意を傷付けずに添削されて入選した句もありましょう。そんな時は原句と批べて表現の方法を知って頂きたい。「成る程」「そうか」と感じるだけでも、既に一歩前進したのです。宝くじの当選番号や入試発表を見るような、ただ何句抜けた、たった一句だったと知るだけでは上達は致しません。

四、投句に際しての注意

投句用紙は投句柳箋か原稿用紙、便箋を使用して下さい。小さい紙切れやハガキに鉛筆書きにされるのは整理にも困りますし、折角の句が泣きます。文字は出来るだけ楷書で大きく書くことです。小さくあまりに上手にくずして書かれると、読み難く、選者困らしであり、没になりかねないのです。

五、選者の気構え

選者は菊沢小松園氏、西尾栞氏、松江梅里氏、それに私の四名の共選ということになっています。私を除きまして各選者は御承知の叱く作句年輪は永く、多くの優秀句を世に送り、それぞれ独自の風格を持っていられ、選者としての手腕も秀で、育成指導に当っていられる方々ばかりです。

およそ選には二つの方法がありまして、没の句を見付けてどんどん捨てて選句する方法と出来得るかぎり抜こうとする選とがあります。近作柳樽は恐らく各選者は後者の選の方法を執られるだろうと思います。即ち育成指導による選をされましょう。それは決して寛選の意味でなく、厳正に作者の句風に応じて選をされましょう。

どうか選者を信頼して、どしどし投句して下さい。選者一同、熱と期待を持って皆さんの玉句を待っています。

規定の十句を越えた句は翌月号へ順おくりにさせていただきます。（編集部）

本誌の投句には
なるべくご利用ください
川柳雑誌
特製　柳箋
一冊（五十枚）三十円
送料　二十円

同人

特集

第二の人生

第二の人生について

後藤梅志

人と生れて、誰れしも思うところの「第二の人生」をもてることは、まことに素晴らしいことだ。

だが、この第二の人生に、はいれる人は、そうたんとない。私なぞは、第二の人生どころか、あまり香んばしくない「第一の人生」から、ずるずるべったりに、死にぞこないの形で、余生と取組んでいる。

しかし幸いなことに、簡単に手術をしたのが、実は大患であり、すこし不自由感をのこしただけで静養の時期を得たことは、運がよかったといえる。

人間は、ずっと達者でいて、志半ばにしてぽっくり死んでしまう人も、随分とおおい。

それよりは、からだや頭をあまり酷使しないうちに、怪我をするか、病気でもし、社会に一時とり残されてしまうほうが、賢明である。そうすると、あんがいに長もてがして、生きるのが苦にならなくなる。そればかりではない。今まで気がつかなかったいろいろのものが目にうつる。たとえば、ささやかな庭木や、鉢植なぞにも愛情が芽生える。

大地の恩というものがあるが、一坪の庭にも陽あたりのいい場所とわるい場所があり、陽あたりのわるい場所に植えた植木は、いつまでも大きくならない。それでも大地から吸上げる水分というものは、日蔭ほどつづくものと見えめったに枯れるということもない。

それに反して鉢植えのものは、水をやるのを怠るとすぐひからびてしまう。欲しい欲しい水を、人間はともすると忘れるし、段々横着になって、水をやらないですむ西洋草花なぞを買いこんでくる。

今年は長梅雨で、直か植えの朝顔は、どこの家も出来がわるく見すぼらしいが、私が丹精した朝顔は、毎朝ゆたかな花を十五、六もつけて私を慰めてくれる。家中のものが、やあ、けさは五ついろ全部咲いた。十七か八かなぞと、がやがやっている。しかしこれまでにする二カ月あまりは、私と娘がとても神経をつかった。よるは必ず夜露にあてる。日がかげれば七つの鉢を陽あたりのいい場所へうつす。夜中に豪雨が降れば、軒下へ傘をさしてうつす。ずぶ濡れになったものだ。

大地へ植えたものとちがって、鉢植えのものは、水を欲することおびただしい。それを欠かさず朝夕水をやるということは、人と人の愛情に通じる。しみじみした心境にならざるを得ないのである。

人間というものは、死のうと思っても、なかなか死ねないもので

あって、むしろ一カ所ぐらいは不自由なとこがある方が、頑張りが出て、かえってよいのではないかと思ったりする。

師逝きぬ根性ばかり　もらいうけ　梅志

これが私の余生。第二の人生というものには、ほど遠い感があるが、また一面、極めて明朗でもある。

第二の人生

戸田古方

「第二の人生」って何のことだろうと反省する。四六〇号を重ねた「川柳雑誌」が今、「川柳塔」と再生したのである。こういうことが「第二の人生」かとも思う。

ことし、還暦を迎えて、「第三の人生」を考えはじめている。私は一九〇五に生れた。大人になって、商売人の片われとして暮した一九四一までは自分の意思とは別に生きてきたと思いこんでいる。

一九四二、私は学校の先生になった。川柳をはじめたのはその四年前である。新しい先生の仕事を人並みにするために、絵をかくこと、シナリオを勉強することとともに、川柳することは趣味以上のものになっていた。結婚したのは一九三〇で、もうこの時は二人の子供の父親であった。私は自分の意思で行動しはじめた。

そういう次第で、一九四二から去年一九六四までを「第一の人生」といいたくもなるのである。そして、今年からがほんとうの「第二の人生」と思えてくる。何だかグルグルまわりばかりしてと笑われそうだ。

自分の意思で生きることがどんなにむつかしいかということをはじめてしみじみ味わったのが、この二十年あまりの間であった。旋風を巻きおこして、あやうく足をふみ外しそうになったこともある。私は全く、ピエロであった。そして、「ひとりでは何もできない、だが、ひとりではじめねばならない。」と、どっかの本屋の広告にかいてあった金言を身近かに味ったものだ。

自身の足で歩いてみて、自分がどんなに足弱かということも知らされた。

この度び、路郎先生の死に逢っていっそうその感が深い。孝行したい時には親はなし、もう叱ってくださる方はいられない。わたしは今、大きなポイントに入っている。清算すべきは清算しなければなるまい。これからは風当りも強かろう。それこそ、「ひとりでは何もできない。」みなさんとごいっしょに生かせていただいて、私の及ぶことでお力にもならねばなるまい。それに値する自分に精進せねばならぬ。しっかり組まれたスクラムの手をはなすまい。やっぱり「第二の人生」はこれからはじまるものらしい。

第二の人生こそ本もの

本田恵二朗

昭和二十一年三月大阪市が第一回の大空襲に見舞われて度肝を抜かれたものだが、その抜かれた者の中にこの私もいた。焼夷弾が無気味な音で屋根を突き破って二階を火の海にしたものである。西区靱南通五丁目のわが城はかくしてあえなく落城、煤けた顔の私はリック一つ背負って空腹の足をひきずりながら私の第二の人生が始められたのである。

田舎へ帰ろう。田舎者になってしまおうと決心させたのは寒々としたふところばかりではなく、四十才という年令がそうさせたのだと思っている。田舎に引っこんでみて素朴のよさを知り、生れ故郷の温さを知り、なんとなく落着いた人生を知ることが出来たと同時に、戦争というものに奪いとられ

ていた川柳も取り戻すことが出来もした。生活上の第二の人生ばかりでなく川柳の方でも第二の人生となったばかりか、川柳への意欲が旧に倍したファイトとなって現われてきたから一層にうれしい。数年前に妻の里であるここ下津井海岸に移り住んで今日に至るが、これが第二の人生の延長であり、発展であり、私の生涯の安住の地ともなったのである。

天職を支柱としてその右手に児島川柳会を握り、また左手にはライオンズという奉仕活動を握りしめている。この三者を完全無欠に鼎立させることによって私の第二の人生は完全に充実したものとなると心得えている。

そこで思うに人生は第一は仮りのもので、第二こそ本ものであると思うがどんなものであろうか。

第一の人生踏台にして
今日があり
茶をすすりながら
第二の人生謳歌する

新聞を切りぬく くらしなど知らず（水府）

不二田一三夫

昭和三十九年七月号「番傘」第一ページの故岸本水府先生の〝句帖〟に、

――新聞を切りぬく
くらしなど知らず

という句がある。

「ほほう、新聞を切りぬくだけで小づかいをくださるその上に、原稿を書くなりなんなり好きなようにしろとは、今どきめずらしいな美談ですな」

と水府先生は、ぼくの顔をのぞきこみながらいわれた。ぼくが「川柳雑誌」をやめて、ちょうど一年くらいたったころ、水府先生ご夫妻に夕食をご馳走になったことがあった。先生がひいきにしておられた天下茶屋のバーベキュー専門の店で、うかつにも店名が思い出せないが、山賊焼きとかなんとかいう風変わりな店だった。店内には水府先生が筆をとられた玉句が掲げてあったが、これも忘れてしまった。

その日のぼくは（川雑をやめた日から川柳家廃業）放送作家のタマゴとして、いろいろ先生からお教えを願ったのである。（先生はNHK上方落語の顧問をしておられたことがあった）たまたま川柳の話になると、

「不二田さんとこうして話をしているが、どなたの悪口も二人がいっていなかったということを、キミが証人になってくれよ」

と水府先生は、かたわらの奥さんにこういわれたものである。

〝番傘〟と〝川雑〟の間には、なにか宿命的なものが横たわっていて、それを水府先生が気をつかわれたようだった。だが、水府先生は五十年も前の路郎先生との美しい友情のかずかずをぼくに語ってくださったのである。

路郎先生が逝去された翌日、城東病院に入院されていた水府先生から速達がきた。

――手もとに最近の路郎君の写真がないので至急都合してほしい。

とのことである。

〝番傘〟へ使われるのだと思ったから、写真版になりそうなのを二十数葉すぐお送りした。二、三日してから未使用の分を返送されてきたが、路郎先生のゆかた姿の写真を見て、「ナミダ催す」とあった。世間ではどう云おうとお二人の心の底には美しい友情が流れていたのである。

――水府・路郎対談。

ぼくが川雑にいたころ、ひそかにこのタイトルで、両先生の対談を企画したことがあった。生涯の仕事にとまで、執念をもやしつづけたものだが、ついに実現せずじまいになってしまった。

「川柳をすると漫才の台本がヘタになるよ」

と秋田実先生がいわれるのだ。だが〝川柳塔〟発刊に際して、先輩諸氏が、ぼくにもう一度、川柳へ復帰するチャンスをあたえてくださったのである。そんなわけでまた人生が変わりそうである。

戦争と妻

川岡　霊眼子

昭和二十五年八月一日、光生教団本庁管長として、文部省認証（日本宗教史記載）東京教文館発行。昭和三十三年七月二十五日、真理求導会管長（諫早郷土史記載）諫早市史編纂室諫早市長野村儀平発行。昭和三十三年十二月二日より、諫早市天満町、諫早三大景勝風致地、岩屋山霊眼山房座主、昭和三十四年一月四日、大阪朝日新聞掲載公報並に長崎新聞発表、現在霊眼視と称して、千里眼を営む。こうした肩書のありのままの裏を返せば、その履歴は、明治四十年九月二十五日、佐世保市春日町に、日露終戦直後生る。

大正九年、福岡県下嘉穂の小炭坑師の父が職業に失敗して、佐世保市に舞戻り、私が飯塚中学を中退して、簡単に転校が出来ず、入学を阻まれ、その翌年の大正十年夏、十四才の時、市内の精美堂という九州唯一を誇る時計貴金属貿易商の丁稚小僧として入店し、佐世保商業学校夜間部第一期生として通学した。昭和元年まで、満五カ年間ここに居て、徴兵検査に丙種で落伍するや、昭和二年春、大阪に向けてバスケット一箇と、八十円の金子を持って出奔してしまった。始め野田阪神海老江のKY商会に入店し、福島の実業学校に働きながら通学しファイトを燃やした。

昭和四年関大予科入学、生活のため二年で中退し、東淀川区加島町の大阪機工KKに手に豆作って働く職工になった。数え年二十三才になっていた。そんな関係で私は昭和十年東淀川区にアパート生活した後、三津屋北通りに市営住宅を見つけて住んだ、ここに来て孤独同様な私は川柳名乙平こと町会長の乙谷耕吉氏によく愛された。私の住む住宅の真向いの家に一年位して、どこかの塗料商会に勤めていた後の川雑社の武部香林、若菜夫妻が組入して来た。私が二十九才で家庭組合長をしていた頃である。二人で麻生路郎先生の川柳の話をお聞きしたり、その後香林と発起して川雑神津支部をつくったのもそんな縁故があったからである。

昭和十三年七月には国家総動員法が適用され、労働者の雇入、賃金、労働時間などが統制され、かくして経済統制は急ピッチとなった。この計画で重要物資は軍需、官需、輸出、需要、民需と区別して割当てされたが、その方針は軍需を優先とし、輸出をふやして海外からの軍需資材の買受を多くし民需は切りつめた。

国内向けの綿糸、綿織物の製造や小売店はストック以外の販売は禁止され、鉄鋼、銅、亜鉛、鉛、ゴム、羊毛など、民需使用も禁止された。この重要鉄鋼配分事務に私はOKKを止めてから配属され庶務と書記をした。のち総理大臣と陸軍大臣を兼任した東条英機さんの従弟、福田秀生氏と机を並べて、鉄の統制事務を七カ年執った。ビジネスは中之島二の五〇、戦死したオリンピックの大江末夫選手は隣室に勤めていた。家に帰れば町内一の若い役員さんとして一、東淀川幹事、一、学区統後委員、一、北中家庭組合長、一、第八防空組合長、一、教化部長、一、町内総務次長などの六つも七つもの兼任役職が待っていて、私を寸刻の暇なきまでに酷使した。この酷使に耐えかねて、この役を子供のない、川柳の武部香林に譲り、昭和十七年七月十六日東淀川柴島四一番地に転住した。私の第二の人生の初歩はその頃から始まっていた。その年の秋、生駒山頂に登った時から、たった一日で突如霊感々応と霊言を聞く身になった。それから毎日狂人的態度が始まった、これを私はこういう文章で纏めてみた。

〃霊眼視とは宇宙大霊の位相の高度なるものを神仏の霊とし、人に伝わる念波と、神仏の霊波と交流して通信会話の出来る霊聴現象で、人事一般のご訊事や、遠隔透視が出来、将来の指導をなすことの出来る霊視を行い、鉛筆やペン

を手に持って白紙に向い、虚心に受身の心境でいると、手先が自動的に動き出して、本人（霊媒者）のもっている知識以上のことが書き示される。霊導筆記で、これを宗教ではお筆先という〃。この道に専念したため、極端な狂人状態が続き「日本敗戦必ず来る」と大阪市内の目抜通りばかりで大叫したため、流言飛語禁止令に触れ、布施に拘禁されること一カ年半、その頃の妻は優しかったが、私を狂人と思込み、二人の娘の将来を思ったのか、二児を連れて私から去ってしまった、熊本の女であった。従って現在の妻は二度目の妻であり、霊学を完成してからの第二の人生伴侶者である。

こんなわけで現在の妻は大阪の出来事は多く知らない。彼女とは昭和十九年六月、私が三十八才で九州に疎開して、食糧難の列車内で知り合った。彼女は当時、夫が九州の大村聯隊の副官で陸軍中佐、その後佐賀聯隊に転属し、ビルマ烈部隊長として出征し、戦死の報を受けていた。病身の実弟一人を擁して、満三十三才の戦争未亡人でもあった。一人であって大阪帰りの私とは佐賀と長崎線の往復の車中で知合となり、それが奇縁で戦時中わずかの荷物を持ち合って家庭を作った。実弟も面倒を見ているうち、十九才で死んだ。陸軍大佐の先夫は今、彼の故郷の菩提寺に静かに眠って、その位牌はその肉親の方が見ていられる。私に入籍した今の妻、美寿栄はあれからもう今年大学受験準備中の長男に続いて、高校三年の次男、高校一年の上の娘と、中学三年の下の娘との、二男二女の組合せの母として老いていきつつある。私も風情から、霊眼子の第二の人生をいま辿りつつ川柳の趣味に生き長崎県内の新聞の一部の選者を担当している。

藪蚊庵の記

早川清生

職業を変わったり定年になったりしたときよくこれから第二の人生だという。しかし私などまだまだ若いつもりだし、一途に実直な公務員生活を続けているので、この意味での第二の人生などあろう筈はない。また不幸にして人生観を変えるような恋愛を経験したこともないが、公的あるいは社会的な生活を第一の人生とすると、私的な家庭生活は第二の人生といえるかもしれない。

しかし現代はあらゆる面での画一化を押し進め、個人生活での個性が極度に認められにくくなっている。まして私など公営住宅に住んでいるので、ご近所ともどもまったく規格的な日々を余儀なくされている。その中でわずかに各戸に与えられた庭がそこに住む人たちの違いを示している。こういった住宅の庭は都会の長屋や旧来の農家に見られなかった新しい形態のもので、どの家庭にも貧しいが自由になる土と緑を与えたことは一つの進歩ではあろう。

他所者のかなしさ
景色ほめて住む

私がこの土地へきてもう十年になる。歴史と文学に名高い天王山の麓で月と竹とが美しい。公営住宅といっても私のところは町営だから、居住者のほとんどは土着の人である。反面町の一部に府の広い団地ができ、社宅が建ってそれぞれ厚い殻を作った。両者の融和は町にとって頭の痛い課題だ。海にできる潮目のようなものが、市場でも銭湯でもできる。

団地つ子土地つ子
PTAの溝

住宅に入る人たちは長い間アパートか下宿に堪えてきたので、抑圧から解放されると申し合わせたように犬を飼い木を植えだす。そして

住宅に入り
いっせいに妊み出す

蓄積されたエネルギーは、犬や木が飽きられて野犬の群となり、植木が乱雑になり出した頃、住宅を子供でいっぱいにする。

庭はその家族の性格を象徴す

集路一

吟題課

傘

石倉旅風選

後から傘さしかける鞄持ち　晃男
雨男傘と撮した二見館　淀月
雨コート蛇の目浮世絵京の町　勝子
相合傘惜くもアーケードですぼめ　旭峯
嫁ぐ娘へ母が心の傘と下駄　同
天気予報外れ日傘にしてもどり　宗太郎
傘さした男の方が濡れてゆく　同
鍵っ子を迎えの傘へいれてやり　同
傘の水切って見上げる虹の橋　淀月
人
予報通り降って小言の迎え傘　勝子
地
妾宅へ迎えの傘を走らせる　代仕男
天
迎え傘手を上げ改札出る夫　章雅
軸
降ったから持たせた甲斐があった傘

停電

山根白星選

停電へ窓から外も確かめる　晃男
ローソクを灯けたら停電パットつき　勝子
停電に仏間の灯りだけ残し　旭峯
停電の部屋に鉄砲百合におい　同
停電で出来損こなった炊飯器　章雅
肩を揉む按摩に停電かときかれ　同

盆踊り

若本多久志選

盆踊り鎮守の森をぬける唄　晃男
独酌の父が留守居の盆おどり　淀月
十五夜が編笠のぞく盆おどり　代仕男
ダムになる村へ帰って盆おどり　宗太郎
盆おどりどれが嫁やら娘やら　勝子
星を浴び河内音頭の輪が廻わり　繁太郎
盆踊り帰りは楽しい野良の道　ろ亭
湯治場に来て盆踊りの輪にまじり　光道
盆おどり我が娘もすっかり大人なり　一夫
青い目も手拍子上手に盆踊り　旭峯
観光課も一肌ぬいだ盆おどり　章雅
盆おどり教育長も同じ輪　古心
人
盆踊り済んで三ちゃんだけの村　宗太郎
地
碧い目も混って基地の盆おどり　代仕男
天
亡き妻をひそかにさがす踊りの輪　光道
軸
ジェミニ飛ぶ夜空の下で盆おどり

る。一家の顔である。厚化粧した庭もあれば不精ひげを生やした庭もある。私などとても小まめに手入れをする自信はないし、古刹にみる哲学的な庭を作る造詣などもちろん持ち合わせないが、やはりやたらと植木を買いこんだ。しかし十年の太陽と水は密植されて伸び切った樹木の下で、わが家をジャングルにおける土人の小屋に等しいものと化し去った。四季に絶えない花を求めて蝶が集まり螢が舞うといえばロマンチックだが、パンのジャムを木蔭蝶がなめる位はがまんするとして、また鍵の穴に蜂がはいりこんで戸をつぶさねばならないこともがまんするとして、床の下でマムシが輪になり、白蟻が柱に巣食い、ムカデが人の寝ている上を這うのである。

最近蚊がふえた。農民の肌を刺す大きい薮蚊である。私は近くに水田が多いからだと信じているが近所の非科学的な主婦たちはわが家の茂りのせいだと白眼視するのである。

おじぎしておじぎして
住みなれても他郷

・作句教室・

研究題「肥える」

・清水白柳・

新らたに生れた川柳塔で、みなさんと共に作句研究に取組んでゆきたいという願いが実って、今月から早速のせることが出来たのは誠にうれしいことである。これから毎号研究題を出して手をつないで進んでゆきたいと思うので何卒御支援下さるようお願いしたい。

初めに娘さんが肥えたくないということを詠んだ句が沢山あつた中から拾い出した。

煙草喫う娘肥えない為という　隆史
適令期肥えて見たいと胸を病み　みさ子
肉断つて肥えるを嫌う娘に因り　勝子
やせたさの美容体操が又肥り　杏花
肥えるのを気にする娘恋を知り　酔夢
塩コブでお茶漬け長女尚肥り　真砂

痩せるための煙草だというのは、その娘さんの言い逃れのように作者が感じたのが判つて面白い。適令期の句にはつかんだら折れそうな細い腕などが目に見えるようである。作者はそこに温かい目を向けている。肉断つてまで肥えたくないという娘の片意地にほとほと弱っている母もあるのである。美容体操をすると運動が足つて尚肥えてくるという皮肉さを作者はよくつかんでいて面白い句になった。恋を知ってからスマートになりたいと思い出した娘さんは健康そのものの身体なのであろうか。塩コブで茶漬でも食べたら痩せるだろうと実行したら栄養がよくて尚肥つたという矛盾をついたのは成功している。

初孫を抱いて姑もよく肥り　李羅
赤ちやんの肥えてないのは可愛そう　雄声
適当に肥えて赤ちやん優良児　李朋

「丸丸と手にもエクボで孫重い　千夏

姑もよく肥えているという句はその家庭の情景をよく描写している。痩せた赤ちゃんは可愛そうだという句は突込みが一寸足りなかったようである。優良児の句は適当に肥えてという語句が生きている。手にもエクボの句には実感がある。殊に孫重しというのが佳い。

更年期わたしも人であつて肥え　松風
血圧を気に老境を肥えはじめ　真砂
妻の座にあぐらをかいて肥えはじめ　酔夢
また肥りましたの団地秋の風　李羅
あの頃は肥えてた妻の角かくし　滋雀
来客へあんた出てヨと肥えて居り　与志

更年期の句のわたしも人でという句語にはひかれるものがある、こうした句語を使われると句が深くなるのである。血圧と肥えるという句は多くあったが、この老境をというのがよかった。それは作者の年令を示しているからである。妻の座の句は佳句である。あぐらをかいてという句語が生きているのであろう。団地の句は秋の風がよいと思った、それによって天高くというのを思い出させるからである。角かくしの句には世帯やつれというか、中年の妻の姿が浮び上ってくる。あんた出てヨという句は、すらりと出来ている、そこにはシュミーズ一枚で居のかも知れない妻の姿を嫌味なく描き出していると思う。

解説者になつて太つた元選手　弘生
贅肉へコーチ微妙な気を使い　李朋

何の選手でも肥えていては運動がしにくい

ものだ、それに気を使っているのはコーチだけではないであろう、選手自身もよく心得ているのである。そうした選手が解説者という職につくと、途端に肥えるのである。鋭い作者の眼を感じさせる句である。

部課長に申しわけなく腹が出る　杏花
因果なことに社長になつてもよう肥えず　雄声

平社員だがだんだん格幅がよくなって重役タイプになって来て内心喜んで居るのだが、上役に何かすまない気がするという句は面白い。社長の句はこれと反対に肥えたいのだがこれだけはどうにもならない、そこに川柳が生れてくる素地があるのであろう。

財産を肥やしたとこでポクリ死に　専翁

これは皮肉なことである。一方ではそれを待っているものが居るかも知れない。

肥えたのへ同情もする安定所　保夫

こうデップリ肥っていてはどんな仕事でもというわけにはゆかない、そんなことから安定所で同情される羽目になるのである。同情もという、もの一字がこの句のポイントである。

まだ肥える悩みへバンド予備の穴　滋雀

ビール腹というのか最近とくに肥えてきたのだが、まだまだ肥えそうで弱っているのだその悩みをバンドの穴であらわした手腕は高く評価されていいと思う。

不況よそ家康読んで社を肥やし　みさ子

これは身体の肥えるのでなく会社が肥えるのを詠んでいる。徳川家康を読んでそれを利用したという着想は面白いと思った。

目が肥えている舌芝居の衣装方　章雅

この句も身体の句でない、目が肥えているというよく使われる言葉を使って、それを衣装方という特殊な職業に結びつけて成功しているという句である。

桜島肥える大根こそ警異　繁太郎

桜島大根を着想されたのはよかったと思う。慾を言えば結びの警異という語がやや説明じみた感じがするので惜しいと思う。

尻一つ叩かれ肉牛値がきまり　与志

パチンと音のする程平手で叩いたのであろうか、その音が聞えるような句である、売られるとも知らぬ牛の表情も目に見えるようである。

退院を肥えた肥えたと迎えられ　弘生

これが病人なのかと思う程肥えて退院した人を知っているが、そんなところに健康保険や福祉施設のあり方を考えさせられることもあったのである。作者はそうした事まで感じているのかどうか知らないが、いい句だと思う。

未決でもやくざのボスは肥えている　章雅

未決も拘置所も私は知らないが、こうした事が常識になっているのである。こんな世の中だからこそ川柳を一人でも多くの人に知ってもらいたいと思っているのである。

アコーデオンもうまい白衣が肥えている　保夫

痛烈な皮肉である。同情を乞うている白衣が色艶もよく肥えていて、同情する方は税金や何やかで痩せ細っているのが現在の世相なのである。この句のアコーデオンもというもの字に深いうがちを感じさせられるのでそれを味わってほしいと思う。

もっと採りあげたかったのだが、ゆとりがなかったので残念乍ら割愛した。次回からは本腰を入れて取組むつもりで居るので期待して頂きたい。

よう肥えてゆうべの蚊帳に蚊が残り　白柳

十一月号発表
研究題「掃く」　五句以内

締切　十月七日着便まで

十二月号発表
研究題「市場」　五句以内

締切　十月二十五日

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四
清水白柳

雪国の拍手

大野風柳

「ボクもニイヅへ行きますよ」と麻生路郎先生は、私にささやいた。昭和三十二年の九月、金沢市の北国新聞社で開かれた〝北国川柳大会〟の懇親会のときである。そのお約束も果たさず、先生はなくなられた。

また先生が数年前に東北川柳大会（仙台）に参加されたときも、お帰りに新潟を廻ってくださいとお願いした。しかし、東京の三太郎先生と逢うからというのでこれもまた実現しなかった。

先生がなくなられるときの意志によって「川柳雑誌」が廃刊と聞いたとき、私たち柳都の本社では、さすが先生だけあると、みんなで先生のご冥福を祈った。そして更に不朽洞会員が再結束して「川柳塔」を発行することを知ったとき、不朽洞会員の根性にみんなで頭をさげた。

「川柳雑誌」が同人制をとっていなかったため、その廃刊は当然でもあるし、それを遺言とされた先生の処置は尊いと思う。

すでに「川柳塔」の発刊が企画され、中島生々庵氏を中心にして、関西柳界に新しい力が芽生えんとしている。はるかに雪国の新潟から絶大なる拍手を贈りたい。

☆

川柳塔社婦人友の会

女流作家ばかりのグループです。作品は本誌〝金泥集〟へ発表。（会費一年百二十円）

入会申込み所

大阪市南区二ツ井戸町二三・山川阿茶

☆

金泥集

麻生葭乃選

課題「味　方」

民衆の眼ざめ味方の票が減り　阿茶
寝返って来た味方です要注意
根性に惚れて味方に引き入れる
引き入れた味方にかかる袖の下　みさ子
負けそうな方へ味方をしてやる気
味方まであくどいボスに見切り?
頭数ばかりで骨のない味方　きさ子
縄のれんくぐつて味方らしくなり
最後まで味方で残るは妻一人　一栄
新社員派閥があつてなやむ日日　奈良子
かくし芸味方の声に助けられ
観客をどつと湧かして味方討ち　逸名
争いは妻に勝ち目の子沢山
妹の危機と腕白おどり出し
味方だと信じ打ち明け裏切られ　勝子
早怯にも味方裏切る日の落ち目
嫁姑きものとなればうまがあい　千夏
たのもしい味方に会社のつとられ
蝉一匹やつて弟を味方にし　あいき
敵味方眠る高野の墓の数　徳子
縄張りも金で片ずく敵味方　トメ子
頼まれた味方とわかる生ま返事　凡子
泣きごとの里に味方の母が待ち　弥生
恩給の味方があつて祖父強気　みよ
一心の外に味方はない覚悟　周甫

次号発表　「艶」
十二月号発表　「赤」
十句以内厳守・十月二十日着便まで

編集部から　お願い！

募集ものによって締切日がまちまちになりましたが、次号から締切日をきめます。

発行日を守るための締切日は、みなさんのほうで守っていただきとうございます。「作句教室」十一月号発表分はスグご投句ください。

なお編集部へのご注文は遠慮なくお申しつけください。

本社

九月句会

40、9、6・自安寺

川柳塔社創立記念句会の前評判は上々ではあったが、それもフタを開けてみないとわからないことである。まず定刻一時間前に西田一栄さんが記録的な一番乗りで出席された。

被講に先きだって中島生々庵氏があいさつをされた。近く同人総会を開いていよいよ本格的に出発することを力強く宣言。

会場の廊下で作句する方が数人、場内は満員の盛況。まずはめでたしという明かるい顔が希望にみちあふれていた。二十代、三十代の若い柳人の進出も力強いかぎりである。選者諸氏も真剣そのものだった。では十月句会にもこの盛会の夢をもう一度。

出席者―一栄・古方・静馬・圭井堂・たつみ・万的・白溪子・笛生・誓二・いさむ・摩天郎・椽人・瓢太・圭太・多久志・鳥荘・滋雀・静波・竹荘・悪郎・孚彦・通隆・舟遊・中性尼・不折・美房・すみれ・花梢・庸佑・進之助・吸江・章子・幸子・美代・季賛・没食子・草々・みさ子・白柳・句楽坊・有子・形水・小松園・潮花・金三・喜風・操子・雄峰・あいき・一三夫・愛論・柳宏子・双楽・生々庵・玲人・すゝむ・天樹・柳志・水客・志朴・梅志・竜子・弥生・素亭・八郎・好郎・痴亭・三司・清人・梅里・奈良子・鉄児・与呂志・薫風・文秋・凡子・博也・

（河井庸佑・整理）

席題「新薬」　石立不折選

新薬をほめて 値段も 言うて去に　与呂志
片カナに なれば 新薬らしくなり　三司
新薬は 広告で のみ 記事で やめ　椽人
新薬と聞かされ少しは効いたよな　志朴
気安めに 医者も 新薬すすめてみ　水客
新薬 より 母には 矢張り 奇応丸　柳志
カタカナの薬が老母の気に入らず　静馬
モルモットのように新薬効いてこず　好郎
新薬が こんな 田舎の ネオン 塔　古方
ショック死が出て新薬の名が知られ　たつみ
新薬が 出来 新薬が 過去となり　舟遊
夏 バテに 名も 新らしい 不老薬　不折

席題「初発」　河相すゝむ選

めさましをかけた初発に乗りおくれ　操子
ローカルの初発いつもの顔がのり　たつみ
終電に 外れ 初発を 寝過して　梅里
日曜の 初発で 馴じ む 釣仲 間　一栄
寒々と 初発の 駅で 待ち 呆け　鉄児
ノータイのままで初発へすべりこん　柳志
飲み過ぎた悔をベンチで待つ初発　文秋
ギリ ギリの 妥結 初発の 閑古鳥　圭井堂
ウナ電へ初発待つてる気のあせり　有子
少々は 喫煙 大目に みて 初発　清人
四人分 初発 列車に 席を 占め　双楽
初発 には 顔が 揃つた 釣天狗　吸江
初発まで 駅で 寝る 気の 新聞紙　潮花
結局は始発にきめたスケジュール　進之助
寝袋で 待つた 初発 の 一 人 旅　章子
初発 まつ 親娘に 夜が 長すぎる　三司
酒臭い のも 居て 初発 駅を出る　中性尼
初発まで 母はウトウト 眠られず　金三
残月へ 初発 ゆつくり 動き 出し　志朴
住宅難 初発で 通う 処に 住み　進之助
電報を 初発の 席で 読み 返えす　失名
ふるさとへ 帰る初発の 窓を取り　操子
男子 誕生 初発の 窓を 開け放ち　圭太
乗り降りの ない駅続き 初発なり　薫風
ガラ空きの 初発へ 都会動き出し　一三夫
社長には 無理な初発と 幹事決め　静馬
夕刊を 持つて 初発の 客と なり　圭太
台風も すぎ 頼母しく きく 初発　梅志
初発まだ 駅の大扉が 開ききらず　古方
沿線を 次々 朝にして ゆく 初発　好郎
初発駅まで引き返し乗るラッシュ　すゝむ

席題「ボールペン」　正本水客選

ボールペン他社出し抜いたトップ記事　清人
大当り という景品の ボールペン　進之助
ボールペン借りて変え唄うつして来　万的
ボールペン 青で役所は 受付けず　玲人
否認する調書にボールペンつまり　美房
ボールペン 濃し下紙を 傷つけて　圭太
ボールペン 母も気軽う 書く便り　与呂志
ボールペン男に見得のないくらし　潮花
忙しい僕へ ボールペン 素直なり　季賛
煙草片手に記者抜目ないボールペン　万的
ボールペンヒモ付きで書く船客票　梅里
ボールペンよ今日も一日なんだぞ　生々庵
ボールペン借り始末書へサインする　清人

ボールペン持ったついでに葉書書く　没食子
ボールペンかすれたまま書き終わり　薫風
どうぞもビジネスというボールペン　古方
肝心のとこかすれてるボールペン　庸佑
ボールペン振って叩いて捨てられる　小松園
ボールペンうず巻書いて書き始め　誓二
予想的中ボールペンでこんわりが来る　句楽坊
カーボンの色に合わせたボールペン　文秋
ボールペン　男まさりの　口をきく　水客

兼題「うそ」　後藤梅志選

父ちゃんのうそがばれてる二日酔　季賛
浮世たたのしいうそもあってよし　三司
うそつかぬ　議員大物には　なれず　圭井堂
うそでもよい安心させてほしい母　白柳
初対面　どちらもうそを　少し持ち　たつみ
うその世に　正直者が　馬鹿に見え　静馬
転々とうそで　固めて　踏み　倒し　梅里
口うるさい女房故のうそじょうず　失名
打つだけの手は打ち尽してのうそとなり　多久志
選挙演説うそつく舌も持ち合わせ　一栄
うそ一つつけず養子にのぞまれる　愛論
眼もみればあんたのうそはすぐわかる　清人
むらむらと湧くくやしさにうそをつき　句楽坊
うそついた悔いが小さい胸をせめ　与呂志
うそ通すために苦心のうそを言い　柳宏子
容疑者の　うそに刑事は　走らされ　庸佑
うその底見破ってから惚れなおし　生々庵
交換手　社長のうそを　ことづかり　柳志
身の上を　話すに少し　うそもまぜ　三司
空いたのがあとへ来るとはバスのうそ　梅里
医者の言う善意のうそにすがりつき　すみれ
融通も効かねばうそもよう言わず　静波
つつぬけを知らずにうそをつき通し　庸佑
うそつけぬ男でひねくれ者に見え　生々庵
ホステスのうそ真にうけて使いこみ　すみれ
うそつきのくせに後援者が絶えず　没食子
善人の　うそ　口かずが　多く　なり　有子
うそ言えばお金をくれる親があり　一三夫
ひと回りしてきた　うその　面白さ　薫風
重症へ　うそが　悲しい　手を　握る　圭太
食べてきたうそがばれてる腹が鳴り　柳志
一と目みるまでぽんぽんがうそになり　梅志

兼題「歩行者」　若本多久志選

歩行者優先　というてて　轢き殺し　千夏
一万歩　ほこりと　排気ガスを吸い　松太朗
歩行者の　姿も　秋を　感じ　出し　雄峯
肥え出した　社長近ころ　歩いてる　静馬
歩行者の　わりには　店へ客がこず　白溪子
妻に腕　かして歩行者の　群に入り　雄峯
歩行者が　頭上　注意に　腹を　たて　梅里
歩行者へ　三十四度の　陽がまとも　清人
旅の街角歩行者としてどなられる　万的
他人に手を上げさせノコノコ横断し　静馬
歩行者と　一緒に　信号　待ちの　犬　凡子
陸橋で　また　一　休み　神　経　痛　好郎
白い杖　ポリスが　ダンプ押し戻し　柳志
歩行者がじゃまになり車がじゃまになり　古方
人の波　青信号に　すい込まれ　操子
あれ以来　右側に　した　敗戦　史　進之助
歩行者の　違反車から　よく目立ち　操子
歩行者をぬうようにしてスリは消え　庸佑
歩行者が　証人に　立つ　事故　現場　水京
歩道橋　邪魔くさそうな　顔も行く　玲人
ナイターの終った足音聞いて寝る　水客
歩行者ぞろぞろ盛り場へ行く曲り角　万的
急停車して　歩行者を　どなりつけ　潮花
傘で泥よけて　歩行者　ぬれて行く　句楽坊
横断歩道てれくさそうに手をあげて　梅里
こんど目の青まで待ってから渡り　古方
歩行者の　頭の　上で　組む　足場　清人
歩行者の　被害　バナナの皮だった　一栄
歩行者の　方が　車へ　気を　使い　あいき
歩行器へ　手術の　痛さ　もう　忘れ　初甫
歩行者を　追い散らしてる　散水車　痴亭
歩行者もポリスの汗を見てわたり　柳志
歩行者が　序幕で　筋を　語らされ　圭井堂

趣味の
きもの
福
呉服店
高橋操子
岸和田市 野田町 一七五
TEL岸貝局②六六三一

歩行者になつても追い越しする若さ　与呂志
遠足の列 コマ切りにして 赤信号　中性尼
歩行者が よけて 通つた 乳母 車　通 隆
横断歩道バイバイの手を上げたまま　圭 太
歩行者の 目撃事件を くつがえし　奈良子
手を 借りて 横断 わたる 白い杖　双 楽
旗もつて 可愛いい 歩行者悠々と　椽 人
手をあげて 歩道の秋を 渡りきり　水 客
試歩のようこう何かさけんで見たくなり　操 子
青になつてからではヒップ間に合わず　生々庵
神経痛 陸橋 見上げ 出る 吐 息　有 子
歩行者優先下に居ろ下に居ろという歩巾　生々庵
ヒトラーのように歩行者手をかざし　一三夫
子沢山 歩きながら 傘たとんでる　孚 彦

兼題「造 花」　川村好郎 選

商魂は 早くも 造花 秋 になり　季 賛
手内職 造花の 春を 指 に 染め　三 司
独り者 去年のバラに ハタキかけ　静 馬
暑さにはかてず造花も添えて生け　奈良子
看護婦の部屋に 一さしある 造花　与呂志
フィナーレ 舞台 造花 の 花吹雪　竹 荘
独身寮 造花に ほこりたまるまま　一 栄
一票に つながる 胸の 赤い バラ　美 房
命日の ほかは造花で 間に合わせ　たつみ
鏡台に 造花を 挿して 夜の 勤め　どんたく
造花かと出したその手をひつこめる　吸 江
キャバレーの恋は造花の陰で咲き　美 房
造花にも 一輪 差しの 幸が あり　志 朴
仏花を 造花に 替えて 勤めに 出　凡 子
囲われの身です造花のむなしさよ　一三夫

ストリツパー造花が守つている視線　滋 雀
一輪ざし造花ですかとみくびられ　文 秋
退院の 朝の 造花の 捨て どころ　圭 太
造花にも 似た生活 その名は二号　水 京
造花でない証拠ポツリ散つて見せ　凡 子
花も造花 恋もまことのない 世相　草 々
一輪の 造花が 雰囲気 和らげる　庸 佑
オトイレの隅で 造花も 色あせる　瓢 太
ホステスの嘘を 造花の下で 聞き　多久志
カトレアを 胸に 受賞の日の笑顔　奈良子
開店を 飾る 造花が 雨に ぬれ　すゝむ
駅は もう造花の 菊で 客を 呼び　好 郎

兼題「宣 伝」　菊沢小松園 選

コマソング末つ子キツチリ覚えとり　与呂志
宣伝車 団地の 朝を わめき たて　潮 花
葬儀屋の 宣伝無情の句を 入れて　痴 亭
宣伝が きいて売れたは 其の当座　摩天郎
宣伝カー 朝の空気を かきまわし　すみれ
宣伝が 利いて 行き先 皆な 同じ　志 朴
安売りのチラシを母はのがさない　孚 彦
宣伝に 凝り すぎ 会社 行 詰り　瓢 太
コマーシヤルをうちり聞いて寝るとする　水 客
宣伝の ハガキ 舞い こむ 初舞台　東雲楼
新聞 を 下から 読んで 宣 伝 課　圭 太
宣伝になると お客は散り はじめ　愛 論
生地いたむ事は 言わない 脱水機　与呂志
ポスターで招いておいてざこ寝させ　柳 志
宣伝カー 埃と 騒音 たてて 消え　柳宏子
仕立上りファツションモデルのとはちがい　古 方
宣伝の 通りに 薬きいて こず　庸 佑
宣伝と 言われた 人の 変り よう　水 客
子供らの口から口へコマーシヤル　美 房
昼間みるネオンの塔はまがぬけて　双 楽
宣伝 したげまつさと それつきり　梅 里
宣伝は 目から口から たたき込み　鳥 荘
宣伝に ざア ます 夫人 躍らされ　小松園

★

川雑九月号（追悼号）発表の〝追悼句会〟での入選句中に、〝形水〟となつているのが多くありますが、小生のは「まねだけの盃ほして座を持たし」一句だけで、他は全部圭水氏の句と思いますからご訂正ください。以後私は〝おおさか〟と呼称いたします。　大阪形水

柳人のご宿泊は
大阪駅から十分

旅　館

立　花　屋

橘高薫風

大阪市北区堂島上2の52
電話341・4613番

川上三太郎氏と中島小石さん（生々庵居）

★柳界展望★

あちらからこちらからお便りを待っています。

（橘高薫風・担当）

☆川上三太郎氏は八月十一日、故岸本水府氏の本葬参列のため来阪。四天王寺から脇田勇、梅子ご夫妻と共に浜寺諏訪の森の生々庵居で夜十二時まで会談され翌十二日予定をくりあげ、午後五時新大阪駅発ひかり号で帰京された。

☆川柳雑誌社副主幹北川春巣氏と路郎先生のご遺族葭乃女史、アート氏は八月二十四日、故人の満中陰の法要を勤めたあと、柳界から故人への芳志香料を、大阪市立中央図書館内短詩文学文庫（故路郎先生創設）へ充実費の一部として寄贈された。

☆岸本水府追悼会は九月九日（木）午後五時三十分から大阪市北区梅ケ枝町電停東、島根ビル九階大中会議室で。

☆大阪市民文化祭川柳大会は別項掲載の通り十一月二十七日（土）午後五時から（午後四時開場）大手前会館で開催。

☆句集「不二」発刊、増井不二也還暦、くつろぎの集いは九月二十六日（日）午前十時から神戸電鉄沿線裏六甲多聞寺で開催。

☆平安川柳社主催の恒例「川柳の日の催し」昭和40年度は9月23日（祝）正午から五条通東大路西入北側若宮八幡宮で。講話「京都百年裏話」らくやき揮毫などの催しがある。

☆「明かるく正しい選挙川柳」が熊本市紺屋今町四六熊本選挙管理委員会から募集されている。郵便はがきに一句ずつ（一人三枚まで）明記して、住所、氏名、職業、年令、男女別を並記し昭和四十年十月十日までに前記選挙管理委員会宛。

☆「せんば」（大阪市）は八月号で二百号となった。今後更に個性的な発展をお祈りする。

☆「柳都」も八月号を通巻二百号記念として発行。自選句集や県内川柳グループ紹介の特集で堅実さを見せている。今後も堅実に伸びる柳誌であろう。

☆阿波おどり句会は百五十名出席の盛会。

☆竹原川柳会主催の第八回近県川柳大会は九月五日竹原市の森川邸で開催されたが、その運営は高校生が担当していた。若々しく新鮮で清潔な気にあふれ出席者に好感を抱かせた。関学川柳会（兵庫県）隠岐高校川柳会（島根県）など各地で若い力が台頭していることは頼もしい限りで、ベテランの理解と援助を切にお願いしたい。

☆尼崎中央公民館では毎月講師を招いて川柳研究会を開催しているが、九月十二日（日）河相すゝむ氏（西宮市）が担当指導された。

☆麻生霞乃女史は故路郎先生の本葬式後雑事整理に忙殺されていたため極度の疲労が出て神経痛を併発、こ一カ月半病臥静養しておられるが、最近は除々に快癒に向っておられる。

☆高須啞三味氏（東京都）は九月二十五日藤島茶六、安藤宗也、松井清志の東都川柳家諸氏と西下、岸本家、麻生家を弔問して、水府・路郎両大家の霊前で瞑福を祈られる。二十六日は増井不二也還暦くつろぎの会に出席。

☆大野風柳氏（新津市）は八月二十三日大阪へ出張、不朽洞を訪れ、路郎先生の霊に合掌礼拝された。

☆清水白柳氏（大阪市）は九月五日第八回近県川柳大会（竹原市）に出席、往路広島へ遊び、平和大橋、原爆記念ドームなどを見物された。帰路は急行安芸で、白渓子・和笛・永断・季賛・岳詩・薫風の諸氏と賑や

かに歓談された。
☆浜田義一郎氏（滋賀大学教授）が岩波書店発行の「文学」九月号で執筆された、初代川柳歿後—蕪斎叶の手記から—の一文は貴重な文献で興味深い。
☆河相すゝむ氏（西宮市）は八月二十七日、出張の余暇を川柳宗家句碑の検分調査に当てられた。竜宝寺に初代川柳の、隅田河畔三囲神社に五世、六世、九世の句碑、木母寺に四世建碑（初代川柳追悼碑にて四世句碑とは断じ難い）を探査竜宝寺の釈氏亮源住職には数時間、種々の資料の提示を受け、多くの教示を得られた。
☆前田喜代人氏（下関市）は川傍柳輪講のメンバーで古川柳研究に着手されて十年、一篇を終了すると第四編輪講に参加されるが、「川柳雑誌」が生れかわって「川柳塔」になることは意味あることですと祝福の辞を寄せられた。
☆佐野卜占氏（八代市）は八月下旬路郎先生の霊前にぬかずき、故人の冥福を祈られた。
☆菱田満秋氏（東京都）は八月二十八日国立公園八丈島へ清遊、昔は鳥も通わぬ所だったそうだが仲々設備も立派に出来ていて驚かされた由。「観光で流人の孫は稼ぐなり」
☆樋口舟逝氏（西宮市）は窪田久美子、太田かつみ、海士天樹、河相すゝむの諸氏と合同発刊する五人句集「習作」の準備を鋭意進めておられる。
☆故路郎先生を偲ぶ句会が旧川雑岡山支部と備前支部で開かれた。先生の第四句碑は厳として吉永町にありますと浜田久米雄氏からお便りがあった。
☆不二田一三夫氏（大阪市）がNHKラジオで発表した柳次、柳太の漫才「顔」と「おふくろさん達者でな」が、読売テレビと毎日テレビにそれぞれ再演され好評だった。
☆橘高薫風著句集「檸檬（れもん）」は昭和四十年七月十一日大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地川柳雑誌社から発行された。麻生路郎先生の序文「視野無限この言葉に尽く」は絶筆となり発刊は先生の死に間に合わなかった。著者十年の句業を三百句にまとめて世に問うもので、知的抒情を標榜する著者の十年の記念塔である。「恋人の膝は檸檬のまるさかな」A5版百六十八頁、定価五百円（送料共）申込みは川柳塔社へ。
☆河相すゝむ氏（西宮市）の住所が九月一日から左記の通り改称になった。西宮市川東町四ノ二九
☆森田仙之助氏（豊中市）の住所も同じく、九月一日から豊中市服部豊町二丁目四番三号と改称。
☆北村白眼子氏（函館市）は函館市東雲町12の16。
☆福島鉄児氏（門真市）は大阪府門真市末広町六六三。
☆西出一栄氏（大阪市）は大阪市天王寺区空堀町八番地。
☆水谷竹荘氏（大阪市）は大阪市阿倍野区文の里四丁目十七番十八号。
☆根上杏花氏（金沢市）は金沢市堀川町29番10号。

転　居

☆槙紫光氏（愛知県）は愛知県宝飯都小坂井町伊奈、富士紡社宅三九号へ転居された。
☆川村英信氏（仙台市）は仙台市長町畑鴨十七ノ六三へ転居された。

故前田雀郎
句碑建立記念
句集「古さと」
夢の中古さと人は
老いもせず
この句が彫られた。
B6版40頁非売品
宇都宮雀郎会事務局発行

佐藤正敏著
句集「ひとりの道」
片ずいた部屋に
時計も合っている
序文・川上三太郎氏
B6版191頁定価五百円
東京都台東区入谷町二〇三、川柳研究社発行

阿達義雄著
増補第二版
「庶民と江戸川柳」
東京都文京区原町十二
中村書店発行

大陸川柳作家
同窓会誌
姫路市豊沢町一三一
大陸川柳家懇話会発行
（非売品）

綿谷雪編
「川柳郷土史散歩」
神戸市葺合区雲井通七ノ四
神戸新聞会館
のじぎく文庫発行

第百七十三回　大萬川柳

新年度第一回「割り込み」入選発表

選者　清水白柳
投句総数　四百十三句
入選　六十二句

大阪　万里
うしろへ割り込んだのはとがめない
大阪　没食子
割り込んでからもモジモジ座を拡げ
大阪　薫風
割り込んで来て学割りを出し
宮崎　卯之助
割り込みの妓へもチップもろてゆり
加賀　久雄
レディファスト今日も遅刻をしてしまい
大阪　水京
割り込みが子供で後退バスの列
大阪　十六里
割り込みをつまみ出したは徹夜組
大阪　市郎
汽車着けばいっせい間にやら列が延び
岡山　藤波
割り込んで新聞他人の肩で読み
大阪　保夫
割り込みが携帯ラジオを大きくし
笠岡　忠三
割り込んで乗れば団体客が占め

笠岡　遠二
行列へからだ半分割り込ませ
大阪　文秋
儲け口うつかり話し割り込まれ
米子　雄々
割り込みへつぶされまいな子を背負い
大阪　春巣
割り込みのおいどくさびのように入れ
富田林　美房
割り込みへさわらぬ神の目がならび
西宮　多久志
割り込みも我れには許せ宮仕え
岸和田　きさ子
月冴えてまたも拡がる踊りの輪
大阪　小松園
割り込みも先き立つものが要ると知り
倉敷　照路
割り込んだとこに私服が居た不運
割り込んだ小男席を逃がさない
高槻　潮花
先頭が動き出したら割り込む気
入札へ縁故ひとりを割り込ませ

京都　八九寸
割り込んだ卓は楽しい水入らず
割り込んだところで記念切手切れ
篠山　可住
暴力が割り込むようにビルを建て
割り込みのくせがついてる指定席
加賀　光郎
割り込みを巡査笑つてつまみ出し
老体をいたわる席を割り込ませ
松原　万竿
こけし棚もう割り込めぬ旅土産
なれたもの先ずちびっこを割り込ませ
大阪　柳志
割り込みたい肚をマイクに見すかされ
いいなりをしてる弱味が割り込めず
笠岡　桃里
割り込みへ子供は知らぬ顔をせず
アベックで割り込むどつもサングラス
奈良　凡茶
うまいこと言うて順番狂わされ
珍しい花割り込んで余らせず
割り込んで来たから菓子の数をかえ
大阪　一栄
眼も見えぬ仔犬乳房へ割り込めり
茄子畑かぼちやの蔓に割り込まれ
控え室急患が来て順狂い
大阪　晃
どこで聞いたか事件師が顔を出す
友情へ割り込む金という魔もの
爆弾のような男に割り込まれ

大萬川柳会々則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その覇を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るをもって目的とす。

二、毎月の出題並びに選者は清水白柳氏が担当され、投句は一人五句以内と定め官製ハガキに限る。選句は公平を期して到着順に一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附記して選句する。

三、毎月末日締切、二十日発表。出題及び入選の発表は毎号の川柳塔誌上に掲載される。

四、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め毎月のベストテンを発表する。天位四点、地位三点、人位二点、佳句一、五点、平抜き一点とする。

五、毎年一月より十二月まで（但し本年度に限り十月より翌年十二月まで）を一年度とし年度間の綜合点の成

泉北　好郎

社長芸しようことなしに割り込ませ
割り込みを列のうしろが承知せず
連名へ割り込みお祝しとく仲

大阪　梅里

ドサクサに割り込むための口喧嘩
年寄りの独り旅なら割り込まそ
割り込んで来て平然とガムを噛み

高槻　静馬

割り込まれた児がオシツコに行きたがり
割り込まれた押してくれたはスリだった
先ず荷物五センチほどへ割り込まそ
割り込んだとたんに釣れが悪るうなり

五　客　石川　宗太郎

停車位置ズレてビリから割り込まれ

大阪　没食子

割り込んで来て入札の値を崩し
車座を一つ拡げて割り込ませ

大阪　金三

割り込んで神輿かつぎの肩がわり

富田林　美房

割り込める肩をゆずつて飲む屋台
人ノ句　笠岡　桃里

割り込みのときを待つてた汽車が着き
地ノ句　石川　宗太郎

安全な距離を保つて割り込まれ
天ノ句　南河内　吸江

山小屋の割り込み雑魚寝苦にならず
選者吟

意識して割り込む膝に眼をつむる

大萬川柳ベストテン

（新年度第一回）

一　**宗太郎**　四、五　石川
二　**静馬**　四、〇　高槻
和泉　東天紅　三　**桃里**　四、〇　笠岡
四　**吸江**　四、〇　南河内
五　**梅里**　三、〇　大阪
六　**好郎**　三、〇　泉北
七　**晃**　三、〇　大阪
八　**一栄**　三、〇　大阪
九　**美房**　二、五　富田林
一〇　**没食子**　二、五　大阪
次点　柳志　二、〇　大阪
以下略

次ぎの兼題「額（がく）」五句以内
今回特に
締切　十月七日
発表　十月二十日

十一月の兼題「初対面」五句以内
締切　十月末日
発表　十一月二十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ十　**大萬川柳会**

績に依り順位を定め年度ベストテン把持者に賞状賞品を贈呈し大会の選者に推薦、祝賀宴に招待する。但し同点の場合は前年度の優位によって定める。

六、本会の大会は毎年一月に開催する。本会の会費及び投句料は不要、但し大会の会費は百円投句料五十円とす。

七、投句その他に就いての連絡先は

大阪市阿倍野区松崎町三ノ十　大萬川柳会宛
電話620 3935

昭和四十年十月　**大萬川柳会**

自選百句

桜井六葉著

発行所
番傘えんぴつ川柳社
金沢市寺町4丁目17番
24号　定価　100円

★まず第一ページから佳句が光る。

—**行きずりにマツチをすつてくれた人**
—**まつ二つ西瓜に及ぶものはなし**
—**うなばらは大いなるもの船遠し**

窪田銀波楼、安川久流美両氏と並んで、北国柳壇の最高峰にあった著者の桜井六葉氏は、両氏が亡くなられた今日、文字通りの最高峰に居られるわけである。六葉氏は旧家の御主人として、百万石時代からその風格のある句風はつとに知られていたのである、こうしてまとめられたものを読まして頂くと、どの頁にも読者を納得させる力強さを持った句が盛られているのを見ることが出来る。みなさんにも是非一読せられるようおすすめしたい句集である。（白柳）

10月の句会

毎月20日締切。
左のようにお書きください。
—編集部

玉造川柳会
時　十一日（月）六時半
題　「飾る」「半分」「松茸」
所　玉造交差点南　大阪信用金庫

南大阪川柳会
時　二十日（水）六時
題　「多忙」「強気」「神経」「インタビュー」
所　阿倍野松崎町　割烹　大萬

南海電鉄句会
時　二十一日（木）
題　「送別会」「継続」「男泣き」
所　難波高架下　親和クラブ

名地物語

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

京都句会　（京都市）　田中鳥雀報

踊り食い非情な人と鮎思う　喜由
鮎のわたおめかけさんの指のもの　三四郎
友づりのおとりになった鮎のてれ　ゆきら
三門で坊さん五右衛門を否定する　鳥雀
門の正面四角な石おいて静かである　極堂
門があ盛装のほこりをはらう虚飾　枯粒
煽られて来たので灯を消してやる　司郎
家族中で煽ると父は若くなる　礫
煽るだけ煽り黒幕である　禎一
老妻に鋭いことは言うまいぞ　幸男
笑顔で答え鋭どさを飲み降ろす　豊次
青田鋭い線で裂かれ高速路完了　白史

備前句会　（岡山県）　横山一声報

電話から目出度い話もちこまれ　伊久野
恋してる電話は鼻で物を言い　柳風子
赤電話酒のにおいが届きそう　鼓山
電話して又老らくの恋となり　美男
電話では言えぬと男足を立て　浄美
赤電話一寸甘えて見たくなり　正洲
月給日マダムの電話やさしすぎ　静子
見廻して声をひそめておる電話　良江
電話機の中に彼女が居てくれる　秋月
記者席の電話が酔使されており　譲士
新設の電話へお世辞言って借り　幸仙
お電話がついて近所へ走らされ　一声
下っぱの意見も聞いて見る不況　芳月
青春は還らず若葉へキスしてみ　三六
つきあいに妻に言えない金が消え　宗義

ハワイ句会　（ハワイ）　築山快夢起報

貧乏をかこち努力を忘れて居　紅茶
貧乏へ出戻りまでも背負う兄　暁舟
貧乏も子供がのびて羨まれ　人生
貧乏も楽し元気で今日も暮れ　内海
貧乏人どこに居るかと百貨店　美舟
貧乏の中から子供は皆学士　カロ女
貧乏へ沢庵変らぬ塩加減　三石
立志伝まず貧乏から書き始め　十四
どん底が妻に笑いを忘れさせ　斧平
後腹が痛むと知って逃げを張り　エス子
腹の底割って話せる友が欲し　万里歩
七転び八起き男の腹が出来　快夢起
腹立ちをおさえる姑世の変り　泉水
腹割って話す男に油断をし　雪女
喜怒哀楽みんな詰め込む太っ腹　紅渡
すき腹にカロリーなんか云われず　柳葉
背に腹はなどと平気で友を売り　峯円
腹ではどうあろうと嫁の口上手　蒼蛇楼
腹一杯食いたく候首相殿　魔花麗
腹を切るまねで膏くり借りてくる　拝山
腹這いで女を口説くピクニック　浮葉子
腹わって話せばわかるいがみ合い　浅太
政治とは相手の腹のさぐり合い　あき坊

岡山句会　（岡山市）　浜田久米雄報

どたん場にきて実力をやっと出し　照路
実力が金の力で後手になり　つる平
実力は故人になって評価され　佐加恵
実力者また肩書が一つ増え　哲郎
実力はあるのにコネがないなげき　天竜
虎の威を借る実力はたかが知れ　秋月
実力の差ですと悔いのない握手　飴ん坊
実力者鶴の一声だけ喋り　胡風
ぜいたくを敵と見た世はとに過ぎ　久米雄

篠山句会　（篠山市）　酒井ひか平報

冷房車窓を開いておこられる　猪村
冷房がきいて熱燗よろこばれ　越山
冷房のバス新国道をひた走り　八陣
冷房があっても扇子使うくせ　竹山
冷房の部屋とはしらず上衣脱ぎ　花月
冷房が当てでデパート見て歩き　梅枝
冷房になって張り切る名古屋場所　凡志
一本の胡瓜も余す新世帯　をさむ
胡瓜かむ音もはずかし初婚の日　寿栄
滝の音彼氏の声が小さ過ぎ　志げを
雀にも足音があるトタン屋根　初音
蠅叩く音で小言へ抗議をし　孝
玉砂利がわたしひとりの音をたて　可住
胎内から音は慣れこのガード下　みのる

唐金の駒犬出征消息断つ　清泉

土佐句会　（高知県）　川竹松風報

乾杯を置くなと下戸も飲まされる　夢生
介抱のいるほど酔えずホームバー　水客
介抱をする約束で酔いつぶれ　はる江
子の病気気長に妻は介抱し　海鳥
介抱を待つ気狸寝入りする　寛
介抱もここから先きはうたがわれ　松風

宇部句会　（宇部市）安平次弘道報

小利口に渡って先輩しのぐ地位　かつ子
へりくつを重ね利口な顔でいる　雞足
利口だと云えば天まで上る馬鹿　わか子
鵜の真似を利口な鳥して溺れ　万年青
薬とは縁が切れない利口な子　実男
看病が三途の川からつれ帰り　てる子
徳を積む心に三途の川浅し　利子
仏心になれず三途の川知らず　半休
当選のつかれ浴衣になって出る　素空
アベックの浴衣あかりをさけて行き　玲子
洋式の暮しで浴衣買ったまま　博子
よく似合うと云う毎晩着るゆかた　信雪
恋をした浴衣おむつに仕立かえ　南風
夕風が臍吹き抜ける浴衣がけ　東村
そこまでの心算が駅まで来たゆかた　九呂平
屋上に提灯ビールの季節が来　弘道
提灯屋と一目でわかる筆運び　一考
提灯の歓迎雨が邪魔をする　いさ夢
岐阜提灯鵜飼いかがりに紅く染み　章雅
むしやくしやが赤提灯に来た様子　羊歳
紅提灯ゆれて夜舟のさんざめき　きよ子
提灯行列あの頃日本は勝っていた　六花
時たまの休み原野に甲羅やく　しげる

城北明老句会　（大阪市）田中多幸報

沿線の景色広告ばかり見え　繁子
沿線の遺跡の丘も今団地　充弘
恩給の植木作りを羨まれ　多幸
栄養のバランス崩す物価高　濁水
銀杏よく生きぬいている御堂筋　弘生
大掃除と言えば皆んなが用が出来　一登
手伝に娘子づれでまにあわず　清江
団地族窓に植木の鉢ならべ　源川
植木鉢二階のすみでそっと咲き　泉生
公約を聞けば明日にも楽になり　茂美

竹原句会　（広島県）　山内静水報

珍客が来ると母ちゃん眼で叱り　勝彦
珍客へ父ちゃん先に酔って居り　広子
楽団の見送り皆んな一寸てれ　浄美
熱中の証拠もの音気がつかず　博司
パン食にしても味噌汁母は焚き　和幸
辞書にない言葉をテレビから習い　清
明日もまた早く起きるぞ床をあげ　俊司
勉強中ですと深夜の音がする　とみ子
今日もまたあの娘の名を書く日記帳　潤
自惚もあって楽しい若い人　一路
汁の実になる菜園を母はもち　季武
歌が好き他人には呑気者に見え　凡女
祭より寄附金先にやって来た　正
こんなネジあった筈だとまだ探し　春男
半分は妓が飲んだ請求書　保人
帰省する息子へすしだ羊羹だ　松風
祖母からの恩を鳥居に掌を合せ　澄恵
共稼ぎ母の手料理頼りにし　菁居
派手な服ミセスの日から気がとがめ　そのみ
日本語へNOの見振りで笑うだけ　鬼焼
物音もなく禅寺の昼下り　紀世美
夕焼を拝みひと時の鍬をふる　卓三
横着を笑われそうで障子張る　操子
修学旅行絵ハガキ帰ってから届き　房枝
夢のない暮しで今日も恙なし　雅風
真の闇わが足音にハッとする　春枝
甘い汁すう馬鹿者に票を入れ　雲助
ウキスキーの小瓶と語り一人旅　政己
極端な例になるがと丸められ　俊勝
傘もって行かせた空が晴れ上り　房子
糸たれる池に静かに動く雲　静水

○

新入りのすました顔に集る目　利恵
父母と見る月がきれいな涼台　勝彦
朝顔と一諸に拝むお日様　浄美
危機一発救われ坊や笑うだけ　潤
でかい事やってやるぞと蹴る小石　俊司
風鈴も夏バテらしい音が絶え　憲次
新入にしては結構お茶の味　清
弟の綿菓子かじってみとうなり　博司
泡を吹く金魚が何か言いたそう　和幸
予想した通り顔ぶれパッとせず　ひさし
潮の香を持って臨海子が帰り　正
扇風機羽根を透している暑さ　壊士
何気ない言葉心のひだにしみ　操子

顔ぶれは皆んないい人丸い鼻　春代
鈍妻と云われピンチに驚かず　笹舟
生かされているので夜を考える　政己
欲の出た妻に小使い当てがわれ　卓三
新入りのデカイ身体を隅におき　松緑
危機一発の発車へ荒い息で着き　緑水
綿菓子をほおばる妻の稚気を見る　菁居
母からの手ほどきの味喜ばれ　そのみ
ヒロシマに集り平和何故割れる　一路
貧しさの中にも笑い声絶えず　澄恵
大阪のホームで一円見付けたり　保人
子等すべるすべる三郎滝の景　季武
嫁こうともせずにコケシをまだ増し　愛鳩
湯上りの香り思わず振り向かせ　松風
朝顔の初咲き皆んなを呼び集め　房枝
箒目のある露路今朝も出勤す　春男
危機一発発炎筒が物申す　呑竜
はりつめた空気の中へお茶が入り　俊勝
バンドにも夏には夏の穴があり　紀世美

どんぐり川柳会　（大阪府）川村好郎報

祭の日舌原色にして子等戻る　胡人
御神灯君も影絵の人となり　圭太
星の降る空へ祭の酔さまし　弥生
地下足袋を脱いで女の足となり　功雄
ふと出した足が女をおびえさし　一人
出直して来れば赤札はられてい　東天紅
出直して来いと貸す気を匂わせる　凡子
新婚へ駅の助役も拍手する　吸江
退院へあやかりたくてする拍手　孝子
ともかくも拍手しておく御高説　太庸
故郷は祭か今日は雲もなし　白扇
足そっとくずして心柔らげる　章子
大根足けなげな恋を仕始める　一計
螺線階段女の足のすばらしい　静波
お祭へ飲むたのしみの客が来る　芳香
夏祭すんで境内蝉しぐれ　若菜
夏祭風鈴一つ買っただけ　肇雪
停年に妻としんみり宵祭　ひとみ
無信心お祭だけは子に曳かれ　喜風
夏祭浴衣離さぬ子の寝顔　草春
宵祭小雨さびしい屋台店　誠二
出稼ぎの四五軒帰らぬ村祭　雄峯
総入歯しても祭の夜はたのし　痴亭
発車ベル喜怒哀楽の足が駈け　のぼる
足もとが焦れてる女人を待つ　とおる
癒え半ば素足が海を焦がれる日　岳太
地を這う百足虫限りないリズムの歩み　くり坊
足組んで一寸モデルの気分なり　幸子
足出してまするサービスに裏があり　悟空
足踏んだ踏まぬたったそれだけで　奈々
出直してみても回転にぶっていい　いわを
ともかくも幹事の拍手で会を閉じ　好郎
枕抱く癖足撫でる癖長病めば　薫風
附合いの提灯だけは出す宵宮　白柳

丸紅川柳会　（大阪市）　川村好郎報

気にしないつもりが涙の容赦なく　美幸
気にすると注がれた酒に酔い切れず　立児
えくぼまで写してほしい無理を云い　星斗
○才から写しつづけた子煩悩　瓢太
気にしない息子気になる親心　扇里
この黒さカラーではっきりさせられる　圭子
見合写真束になる程持ち歩き　泉睦
首だけの記念写真を払わされ　好郎

南海川柳会　（大阪市）　辻圭水報

保険満期貰いはしたが貨弊価値　八郎
恩師と云う手へ保険ことわれず　宏子
保険金黒紋付でもめ始め　句念坊
アリバイへ刑事の足は棒になり　専翁
陳情団の矢表に助役ただお辞儀　貴山
満員車助役も客の尻を押し　柳太
リコールの中で代理助役と云う俺さ　摩天郎
元助役事故の記事をば見逃がさず　圭水
金筋へ村の世話好き写真見せ　和郎

玉造川柳会　（大阪市）　西出一栄報

大声で呼びかけられた国訛り　柳宏子
静座中おなかの虫が遠慮なく　寿美司
ジュースも揃えて幹事気をつかい　六竜子
盃を伏せてジュースにして貰い　一栄
金槌に浜で番する役をつけ　風仙洞
こんがりと海で燒して話題にし　句念坊
片言を海水浴へ連れたがり　珠笑
人工の滝で涼味と味を添え　三時
人工のシュロ褪せている不況バー　野菜
造花の命長すぎて詩にならず　文秋
ドライアイスの煙で見せ場にする舞台　清人
ドライアイスかち割だったナと思い　恒明
顔見世もここに上座にスケジュール　章雅
敬遠の上座と知らず反り返えり　静馬
無礼講と言いつつ上座へ腰をすえ　大庸

上座また紋切型の祝辞述べ　凡九郎
ハイヤーの音して上座の顔が見え　金三

○

挨拶は扇子が一応ものを云い　寿美司
ひねくれた方が値打のある植木　文秋
ザアマスで暮すが川へゴミを捨て　一舟
河鹿なく川なり丸木橋渡る　有子
どぶ川の匂いに馴れて儲けてる　静馬
蚊をわかすだけの川なり葦茂る　白柳
故郷はいいなあ川の底が見え　六竜子
道頓堀川まで夜の顔をもち　柳宏子
望郷の心切なり星光る　八郎
星の数ほどの女やっぱり妻がいる　滋雀
クリスマス舞台の星は金と銀　一栄
名門を目指し園児へ託す夢　市郎
夢ばかり追うて妻子に苦労させ　金三
明け方の夢をも一度繰返し　志津子
アドバルン夢見るように風に揺れ　風仙洞
健康な時の夫と夢で住み　あいき
夢多し一杯に吸う空の碧　章雅

南大阪川柳会　（大阪市）金井文秋報

くじ運が悪く苦手と先ず当り　柳宏子
臨時工日給だけの汗をかき　梅里
云いなりギャラで老歌手旅を行く　静馬
予報では崩れる筈の青い空　清人
臨時休業夫婦げんかのとばっちり　恒明
うたた寝の姿婚期の娘に見えず　文秋
夫よりギャラのよい子の機嫌とり　あいき
焦げつかせ母に内緒の磨き砂　滋雀
人気程会社はギャラを出して居ず　小松園
うたた寝へ掃除機だんだん派手になり　好郎
茶碗の艶ほめて二服目強いられる　章子
内縁のまんま臨時のつもりらし　圭井堂
里がえりまずうたた寝の気持よさ　双楽
臨時収入屑屋へ小さい払い下げ　金三
臨時灯の電線そこらツギだらけ　白柳
数学は苦手体操で点を取り　凡子
敬遠の四球で社長にさからわず　八郎
なし崩しにかえされ小遣銭に消え　章雅

○

おやじまだ陣頭指揮の朝を起き　梅里
どこに惚れたのかのらへまだ貢き　好郎
労基法これがおやじの気に入らず　清人
からくりをジャーナリストの勘が衝き　滋雀
たばこなら借りても借りと思うてず　文秋
見てないがだまし切れないおやじの眼　一舟
肩書の手前値切りもならぬなり　静馬
肩書が出来て我家のパパでなし　あいき
手不足へ回転椅子の留守多く　一栄
ええおやじやったとは死んでからの事　栞
リベートのあるからくりに魅惑され　金三
からくりの冴え人形の血が通い　小松園
来客もないのに応接タバコ減り　柳宏子
からくりがありそうマダムの甘い息　章子
やめてから横のたばこを煙たがり　凡子
一寸したお礼たばこで間に合せ　幸子
肩書で検察降をふりまわし　万里
肩書がついて名刺を出したがり　瓢太
手不足を千手観音みて笑い　双楽
普請場のくわえ煙草に気を使い　白柳
入試パスあとはのらくらする気なり　美房
暗け運にめぐまれ職がまた変り　章雅
来て見れば肩書ほどのこともなし　士郎
果物屋暇に林檎の艶を出し　柳宏子
新入りへ苦手の得意回わらせる　静馬
抜け目なく臨時の賽銭箱を置き　清人
ワンマンに苦手があつた日記帳　恒明
売ら妓へ二つ返事のギャラを出し　梅里
臨時工首の不要が抜けきらず　文秋
臨時工顔の良い娘は残しとき　あいき
外野席の面面崩れたホームラン　滋雀
艶つぽい話になるとすすむ膝　小松園
老舗もう三国人のギャラに負け　好郎
つかんだ夢を秋風が来て崩す　章子
歳に似ぬ艶が二号を囲わせる　圭井堂
うたた寝を仇のように蚊が攻める　双楽
臨時収入屑屋へ小さい払い下げ　金三
うたた寝を起せば枕持つて逃げ　白柳

宴会・折詰・出張パーティ
大萬
阿倍野区松崎町
TEL (621) 3935・7782
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

・九輪水煙・

★みなさんのお力添えによって、この創刊号をお手許へお届けすることが出来るようになった。路郎門下の力を結集した雑誌としては物足らない感を抱かれると思うが、それは不朽洞会がまだ完全に同人制としての転換が行われていないからであって、川柳雑誌九月号に続いて発行するためには川柳塔創刊準備委員の必要に迫られ、その委員によって発行されたのである。

★従ってこの創刊号発行と同時に、同人総会を開きその基礎が確立されて始めてその力が発揮されるのであるから、今後に期待をよせられたいと思う。

★本号には先輩諸先生に御寄稿をお願いしたところ、力強い激励を数多く頂戴して感謝の言葉もない程である。此欄から厚く御礼を申上げると共に今後も御叱正御鞭達を賜るようお願い致したい。

★「川傍柳初篇輪講」は故路郎先生の遺志をついで連載することになった。それと共に鞍馬先生の古句研究も重要な役割りを持っているので続いて御執筆の快諾を得たので期待して頂きたい。

★「川柳塔」「近作柳樽」は従来の選者と、新らたにベストメンバーを加えて新機軸を出してゆきたいと思っているので、ふるって投句してほしいと思う。

★「金泥集」は婦人だけの投句欄として、葭乃先生に引続いて選をして頂くことになっているので、今後の誌上に異彩をはなってゆくことと思う。

★「一路集」は同人交替選ということに考えているので盛んに投句されて腕をきそってほしいものである。

★印刷所へ毎月五日に原稿を入れるため募集物の締切を早くした。一日にはお手元へ屈けるため、皆さんも締切日を守ってください。

★引継ぎ原稿で止むを得ず次号に廻わさして頂いたのもあるが御了承願いたい。

★一三夫さんにすべての編集をやって頂いたので、これだけのものが出来たのである。今後も全力をあげてやって行くと言って居られるので安心してお委せしたいと思う。私はただお手伝いをしたに過ぎない。

（清水白柳）

・一ペン2篇・

▽表紙は南画の大家直原玉青先生をわずらわせた。白柳氏は原稿集めに大わらわだった。八月のさなかでもありご苦労さまの連日だった。文秋、薫風、庸佑氏らも地味な仕事をコツコツやってくださった。

▽じっくり方向を見つめている時間がなかった、とにかく歩きだすこと、ただそれだけだった。

▽いろいろご批判もあることとおもうが、これからは皆様のお声の一つ一つを本誌に盛っていくことがわれわれの仕事だと思っている。

▼階上の編集室の右手には三休橋、左には心斎橋があった。その下を流れていた川が今は自動車の駐車場になっているのである。動かない活字ばっかりにらんでいると眼下をはしる自動車の動きがたまらなくたのしい。ぼくはこの編集室へ毎日二時ごろに来て五時すぎには消えます。そんなわけでお電話はなるべくこの時間にお願いしたいのです。なお夜間のお電話は、七三一—二一六六番（呼）の自宅のほうへお願いいたします。一年中徹夜をするため勝手ながら朝からヒルまでは睡眠中です。

（不二田一三夫）

本社10月句会

爽秋の4B　句箋に躍動

日時　十月八日（金）午後六時

会場　自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

柳話　戸田古方

兼題「山盛り」　菊田いさむ選
「マイカー族」　吉田圭井堂選
「持ち味」　福島鉄児選
「鼻」　清水白柳選

席題　三題（題と選者は当日発表）
—各題三句

会費　百五十円

大阪市南区谷仲之町二〇
川柳塔社
電話大阪271・3985番

★川柳塔社同人を募る！

「川柳雑誌」の旧不朽洞会員は、そのまま「川柳塔社」の同人として、ゼヒお力添えをお願いいたしとうございます。なお新同人は旧不朽洞会員二名による推選となっておりますが、地域によっては推選者一名でも結構です。（本社から一名推選参加いたします）また推選者のいない地域で同人ご希望の方は直接本社同人部へお申込みください。一人でも多く同人がふえることは、そのまま川柳塔社のいしずえとなり、または本誌のページがふえる原動力ともなります。ご協力ください。同人費は月額二百五十円（入会金不要）同人の句は〝川柳塔〟へ発表し、月刊「川柳塔」をお送りいたします。

切取線

川柳塔社同人申込み用紙

住所・氏名・年令

職業・雅号（ふりかな付）

推選者名

同人費　半年分　一年分　金　円

昭和　年　月　日

川柳塔社同人部　御中

川柳塔の創刊を祝う

番傘川柳本社
大阪市北区木幡町四
電話大阪(361)二四五五番
振替大阪二六九一九番

ふあうすと川柳社
神戸市長田区五位池町一丁目一〇
電話神戸(71)四六三八番
振替神戸九一〇六番

平安川柳社
京都市中京区夷川通烏丸西入
電話(23)五二五七番
振替京都七六五番

桜井六葉
石川県鶴来町本町二丁目
七一三六番地

時の川柳社
神戸市兵庫区神田町七九

せんば川柳社
大阪市阿倍野区北畠西一ノ二二
電話大阪(661)五九八七番
振替大阪一二四〇七五番

ますかつと
岡山市内田三〇三
電話岡山(23)四〇二五番
振替岡山四〇二五番

川柳文学社
大阪市東区高麗橋詰町三四
電話大阪(941)二二九〇番
振替大阪五五六〇番

台風24号被害地の皆様にお見舞い申しあげます。

川柳塔社

支部創設ご希望の方に

川雑各支部は川雑終刊と共に自然解消しましたが、川柳塔支部創設ご希望の地域にはご相談に応じます。

▼本誌講読者（同人も含む）五名以上をもつ地域には支部を創設することができます。

▼支部創設の場合は責任者一名を定め、支部名、支部員名簿、支部所在地と責任者の氏名と住所を本社へお届けください。

▼支部を名乗らなくても本誌講読者五名以上の川柳会には毎号各地柳壇へ句報の掲載をいたします。

川柳塔社各地柳壇係

メモ

▼40年7月30日、中島診療院階上で最後の不朽洞会常任理事会が開かれた。川雑後継誌発刊のため常任理事はそのまま準備委員として川柳塔創立へ議案が進められた。出席者は多久志、梅里、栞、恒明、白柳、摩天郎、好郎、春巣諸氏のほかに生々庵、一三夫氏も特別参加した。同人費二百五十円、誌代百二十円にきまる。

▼8月6日、故路郎主幹追悼句会の席上で栞氏から川柳塔発足の件を報告。

▼8月7日、白柳、薫風、一三夫氏で創刊号の編集会議。

▼8月9日、創立準備委員第二回目の会合。白柳、恒明、多久志、好郎、梅里、小松園、一三夫諸氏が出席。まず原稿募集に各氏から名簿提出をすることになり、発行所を生々庵居に決定。

▼8月26日、財源問題のため、形水、多久志、梅里、生々庵、栞、圭井堂諸氏のほかに編集部から白柳、一三夫氏も出席。創刊号はA列5号（菊版）本文六十六ページの出血発行がきまる。

▼9月6日、創立記念句会閉会後、準備委員合議の結果、10月3日午後2時から川柳塔社で同人総会を開く予定。

募集

十一月号発表

川柳塔（10句）　若本多久志選
　　中島生々庵選
　　北川春巣選

近作柳樽（10句）　西尾栞選
　　松江梅里選

課題吟（10句）
「立ち読み」　小西雄々選
「円満」　伊藤茶仏選
「ムード」　服部十九平選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
　　北川春巣選
　　若本多久志選

近作柳樽（10句）　菊沢小松園選
　　川村好郎選

課題吟（10句）
「夜警」　直原七面山選
「ウインド」　田村藤波選
「云いわけ」　長谷川三司選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価　百二十円（送料六円）
半年分　七百五十円（送料共）
一年分　千四百四十円（送料負担）
昭和四十年九月二十五日印刷
昭和四十年十月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　太陽印刷株式会社
発行所　川柳塔社　電話大阪・二七一一・三九五番　振替口座大阪・三三三六八番

昭和四十年九月二十五日 印刷
昭和四十年十月一日発行（毎月一日発行）
川柳塔 十月号
定価 百二十円（送料 六円）

麻生路郎著

川柳鑑賞

川柳の味わい方
珠玉五百数十句

定価250円 送料 80円
B6版 250ページ

取次所 川柳塔社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
電話大阪271・3985番
振替大阪33368番

セドリック
ブルバード 乗用車専門販売店

尼崎日産自動車株式会社

代表取締役 若本真彦

本社
尼崎市尾浜下ノ川434
TEL. 大阪(481)5681(代)

神戸営業所
神戸市長田区二番町4丁目2-1
TEL. 神戸⑤⑥代6725

明石営業所
明石船上硯町82
TEL. 明石⑨1 5834

加古川営業所
加古川市米田町船頭591
TEL. 加古川②5526

姫路営業所
姫路市市川橋通1丁目13
TEL. 姫路㉒6145・7820